

【短篇集】 明星の虚偽、常闇の真理

長閑

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

明星の虚偽、常闇の真理の番外・外伝になります。

一話完結、短編形式であります。

本編の方に元々一緒にいれさせて頂いておりましたが、こちらに分割致しました。

お手数をお掛けする事になりますが、どうかよろしくおねがいします。

こちらも自サイトの方にて掲載しております。自サイトについては本編を参照ください。

目次

〈天剣時代〉 本日の天候は晴れのち曇り	1
〈天剣時代〉 災難はいつもこいつから	7
〈天剣時代〉 平和は日常ではなく一瞬のものにして瞬間。 風邪を引きました。 Version グレンダン	14
背徳の両手	36
先輩と菓子事情	47
全力でばかな十七小隊の話	58
過ぎ去った、記憶	64
いつも通り、変わらない日々	80
その笑顔の輪に、オレは	96
なんだかんだ言って楽しんでいるらしい。	116

〈天剣時代〉 本日の天候は晴れのち曇り

ああほら、だんだんやばい事になってきた。

今日はとつてもいいお天気。弁当でも持って草原で飯が食いたいくらい。

だが、オレたちのこの場はオレ的には曇りだ。

こいつらからすればとつてもいい快晴なのだろうけれど、オレからすれば恐怖のクラウディ。

サニーじゃ無い、クラウディでござい。

捕まったらやられる。

そう感じたウォルターは素直に退こうと思った。

だが、目の前に悠然と座る女が許してはくれなかった。

「逃さないわよ」

そう言った女、この槍殻都市グレンダンを統治する女王であるアルシエイラ・アルモニスは、オレに、にやりと不敵な笑みを……と言うよりは、不気味な笑みを、隣に銀の長髪を流す男とにやにやと笑う男をたずさえて浮かべた。

本日の天候は晴れのち曇り

「捕縛—!!」

すっかり楽しくなったららしい女王、アルシエイラがオレに対して指差しをして意気揚々と叫んだ。

だが、オレとしてはそんな事に……というのもアルシエイラの私用、遊びに巻き込まれては身がもたない。

リンテンスと言った他の天剣授受者は早々に立ち去った。

現在捕縛とアルシエイラに叫ばれてオレを追うのは銀の長い髪が特徴的、家柄もよし、顔立ちもとつても（黙っていると）素敵なサヴァリス・クオルラフィン・ルツケンスと、「面白いから」という理由でこのくだらない遊びに参加した女たらしで有名な化鍊劉使いの天剣授受者、トロイアット・ギャバナレスト・フィランディンだ。

「ウォルター、ストップしてください！ おとなしくおもちゃにされるといいですよ！」

「うるせえよルッケンス、オレを嬉々として追うな、フィランデインもいい加減にしろ！」

「こんな面白い事見逃してたまるかよ！」

「お前興味あるのは女だけだろ！」

「面白いことに男も女も関係ねえだろ！」

「黙れ下世話男！ 消すぞ！」

謁見の間を飛び出し、宮廷を跳び回る。

天劍授受者が全力で内力系活剷を使用しての鬼ごっこのようなものの為、庭園のあちこちが抉れたりしている。

ちなみに、今回の事の発端は、ウォルターが女顔だというアルシエイラの発言から始まった。

「ねえ、ウォルターって女顔よね」

「は？」

突如呟かれた言葉に、ウォルターはきよんとした返事を返した。

今日のアルシエイラは珍しく王宮に居た為なにも言われていなかった、しかし、突如としてそんな事を言い始めたのだ。

「どういうことですか？」

本日の警護当番、サヴァリスがそうアルシエイラに問うた。

ちなみにオレはただ遊びに来ていただけ。

「いやいや、なんか性格的には男だけど顔が女よねって」

「何処がだ。つかなんだ、性格的にはって。性格も顔も身体的にも男だ、眼腐ってんのかあんだ」

「失礼ねー。これでもすつつつつつごっこいい眼してるのよ？」

「知ってるよ、そんな事。そういう意味じゃねえ」

ウォルターが冷静にツツコんだが、暴走モードが稼働し始めたアルシエイラには右から左、スナップを一度して侍女達に何やら服を持ってこさせる。

何度か見たことがあるので知っているが、アルシエイラの私服だ。

「……なにを……するつもりだ……」

「いやあ、女顔だから女ものの着せても楽しいかなーって」

「楽しいか？ 果たして」

「楽しいわよ。ねえサヴァリス」

「そうですね。ウォルターの苦悶に歪む顔とか見てみたいです」

「お前はほんつとに歪みねえな、いろんな意味で!!」

根底の性格は歪んでいるが、そういう所でブレないのはさすがサヴァリスクオリティ。

けどとつてもそのクオリティが残念で仕方ない。

アルシエイラの瞳がまるで汚染獣のようにぎらつきはじめ、続いてサヴァリスがにこやかにやはり胡散臭い笑顔を浮かべる。

つまりここまで来たら、オレに味方は居ない（ルウは除いて）という事は、確定だった。

「……………」

じりじりとアルシエイラ、サヴァリスとの距離を開ける。

だがにやりと黒い笑みを浮かべたアルシエイラはオレをずびしつ、と指さして、サヴァリスに命令する。

「……GO☆」

「……………いつ、ヤだ——!!」

サヴァリスが全力の速度でオレとの間合いを詰めるべく疾走してくる。

オレは瞬間で後方へ下がり、裏拳で謁見の間の扉を叩き開けた。

裏拳を使った反動で後ろに仰け反った身体を、そのまま空中でくるくると回転させてオレは体勢を取り直す。

「おー、派手だな、なにやってるんだ？」

「……………ファイランデイン！」

また嫌なヤツに見つかった、とオレが舌打ちをした。

謁見の間の少し手前の位置の廊下に居たのは、同じ天剣授受者であり所謂変態のトロイアットだ。

サヴァリスがオレに向かう足は止めずにトロイアットに端的に説明をする。

「ウォルターを女装させろという命令が陛下より下りました。僕は苦悶に歪む顔が見たいので参加しています。トロイアットさんもどうですか？」

「おっ、いいねそのしつちやかめつちやかな感じ。おれも参加するわ」「しなくていいしなくていい!!」

すでにサヴァリスが参加しただけでも地獄に近いのに、とオレが叫ぶが、それでもそんな制止はなんのその、トロイアットも嬉々として参加する。

「あー、もー、余計に収拾つかなくなったじゃねえか！」

「そう言うな、ウォルター。楽しいじゃねえか」

「何処が？ 一体何処が？ フイランディンには一体これがどんな遊びにみえているんだろうね」

「いやあ、面白いぜ。おれはどつちかって言うとお前の女装がちらつと見てみたい気がしてきたよ、後になると。なあ、サヴァリスもそうだよな」

「いえ、僕正直女装はどうでもいいんですよね。苦悶に歪む顔が見ただけですから。……ですが、今の状況でも充分苦悶に歪む顔が見れていますし……なかなか楽しくなって来ました」

「来るな、このサディスティック！ あと笑顔がいつもに増して胡散臭い上に酷い有様だぞ！」

「ははは、照れますね」

「褒めてねえよ柄にもねえ事ほざくな」

オレは再び跳躍し、2人の上を超えて謁見の間に飛び込んだ。

ごろごろと地面を転がり、片膝をついた状態でサヴァリス達を迎え撃つ。

掴みかかってきたサヴァリスをそのままの勢いに投げとばし、トロイアットには高圧縮弾を放った。

だがぎりぎりでもトロイアットに避けられ、アルシエイラの方への逃亡を許す。

相変わらず黒い笑みを浮かべた、今回の遊び提案者……アルシエイラはおもいつきり嫌そうな顔をするオレに向かってほくそ笑んだ。

「逃さないわよ」

そしてここで、冒頭に戻る。

「ほら、おとなしく捕まってよね！ このまま逃げてもいいけど僕が楽しいだけだよ！ と言うか楽しくなってきたよ！」

「くたばれルツケンス！ 本気で消すぞ！」

「なあなあ、おれも楽しいんだけど、悪いことかな」

「全力で肯定してやる！」

オレは再び後方に後ずさって、そのまま指先に剄を圧縮した。

外力系衝剄を変化、光琳玉。

本来は錬金鋼の先に系を圧縮しそこから放射状に剄弾を放つ技だが、ここでは四の五の言っていられない。

オレは遠慮なく指先から上級剄技を放つとそのまま庭園にそびえる木の枝の中の一つに着地した。

「酷いな、いきなり剄技放つなんて」

「そう言いながらけろっと思ってるだろうと思ってっから使うんだよ」

オレがそう皮肉を込めて言ったのだが、戦闘狂にはどうもまともな話というものは通じないらしい。

そう思いながら今度は蹴りによる剄を放った。

外力系衝剄の変化、風烈剄。

サヴァリスの使う技だから、ヤツにはわかりきった技だ。

だから、避けると分かっている。

——上空へ逃げる……

それは予想通りだ。

サヴァリスは上空へと逃げた。

だんだんオレ自身が面倒臭くなって来た為、両の手の指から剄技を放つ。

外力系衝剄を変化、光琳玉。

再び、放った。

空中で爆散するものではないもの。

その2つを使い分けてサヴァリスに命中させるべく連射する。

また、片腕の方はトロイアットを自分に近づけさせない為の予防線

だ。

「ははは、甘いよ！ けど、こういうのもなかなか楽し、」

「うるせえなさっさと撃墜されるよ」

「酷いなあー」

「おれもこれ結構危ないんだけど」

「お前は焦げて消えろ、もしくは顔面ズタボロで許してやる」

「その後戻りできねえ」

オレとやはり会話の噛み合わないサヴァリスと何処までも自らを貫くトロイアットとで会話が続けられるが、あまりそれは意味のない会話だった。

「……………それで？ これはどういう状況だ」

仕方ないという様子で王宮の状態を見に来たらしいリンテンスが呟いた。

「あらリン、来たのね。ちょっと遅かったわね。もう少し早ければもっと面白いの見れたのに」

「知らん、そんなことは」

「つれないわねー。あ、そうそう。收拾がつきそうになったらストツプかけてね。わたしは見てるだけで何もしないから」

「……………」

「收拾の見極めはいつでもいいわよ」

アルシェイラの自由な言い分にリンテンスは深々と溜息混じりに口に銜えていた煙草の紫煙を吐き出し、鋼糸を展開させた。

この後、リンテンスの收拾づけの為の行動によりウォルターは捕まり、結局はアルシェイラのおもちゃになったり、決してサヴァリスを喜ばせてはならないとやけくそで爽やかな笑みを浮かべてふざけてあげたり、それによってサヴァリスをたじたじさせたりとか言う話は、また別のお話。

本日の天候は晴のち曇り。

(とこころにより戦闘となるでしょう)

〈天剣時代〉 災難はいつもこいつから

「ちよつとウォルター、いいかしら」

警護当番をしていたウォルターに、そうアルシエイラが切り出した。

こういう時のアルシエイラには嫌な予感しかしない。

なにせ、アルシエイラ表情がサヴァリスのような笑顔だからだ。

災難はいつもこいつから

冒頭のセリフにより、ウォルターは渋々グレンダンの屋根の上を跳んでいた。

アルシエイラの要望はまあ、そこまで難しいことではない。

バーメリン・スワツティス・ノルネ。

潔癖症の彼女が匂いの強い花を浮かべた風呂から全然出てこない、仕事（汚染獣討伐）に出ないとのことらしい。

だが、とウォルターは考える。

毎度毎度、汚染獣戦は女王発案でくじ引きと決まっているのだ。

探索とかでも遊びゴコロ満載にじゃんけんだとかあっち向いてホイで負けたほうが行くだとか、そんな事ばかりの天剣授受者に、仕事に出ないというのはやや無茶というものではないだろうか。

くじ引きもじゃんけんもあっち向いてホイもすべて運勢次第なのだし、なかなかさう言うのは酷だと思っただが。

主にくじ引きあたりを引き当てるのはリテンンスで、サヴァリスがその度に残念そうな顔をする。

ウォルターはまあまあ当たる方で、適度な運動は定期的に来ていてる。

しかし、だからといって……

「まあ、しょうがねえよな」

名目上ではウォルターは天剣授受者、アルシエイラという女王に仕える側の者なのだ。

実力が上であろうと、大衆の面前などではさすがに従わざるをえない。

「大衆の面前じゃあ……ねえけど」

はあ、と再び溜息を吐き出して、ウォルターはデルボネが教えてくれたバーメリンの家に到着した。

とりあえずとインターホンを鳴らすが、反応なし。

何処から入手したのか、アルシエイラに渡された合鍵で玄関を開ける。

ここまで来たのはいい。

だが、だがだ。

(あらあら、バーメリンさんまだお風呂場のようね)

「……………あらあらじゃねえ問題だろ、それ。死活問題だぞ」

言われたので来たが女の入浴中なのだ、一応は。

それを男のウォルターに一体どうしろというのか。

「そうだよ、よくよく考えたらあいつ女なんだよ」

(一番忘れてはいけないことじゃないかしらね)

「今回だとそうだったな……………」

深々と溜息を吐き、どうしようかと首をひねる。

別にバーメリンとは仲が悪いわけでも良いわけでもない。

ようするに、普通。

別に話す時は話し、あまり関わらない時は関わらない。

まあ、普通の友人感覚。

その普通の友人感覚で男のウォルターに、一体どうやって女のバーメリンを浴場から引きずり出せというのか。

「他のヤツにしるよ……………」

(いえ、一番いい選択をしたと思っていますよ。わたしは)

「何処が？」

(いえ、他の方では確実にバーメリンさんと喧嘩になるかと……………)

「オレも一緒だろ、それ」

だが、そう言われると確かに、と頷かざるをえないのは確かだと思

う。

同じ女ということを見ると、カナリスとカウンティア、デルボネだが、バーメリンはカウンティアと仲が悪いし、カナリスはそこまででもないようだがだからといってこういう場は許されなさそうと言えそうだ。

デルボネはこの通りふわふわしている為強行では出なそうだな。ならいつそのことあのアルシエイラが来ればよかったのだ。

リンテンスの家にはちよくちよく遊びに行っているくせに、同じ同性のときに動かないとは何事だ。

「……しょうがねえな……」

ともかく、いままさに脱衣場に居た、とかいう馬鹿な展開も嫌なので脱衣場の外から声をかけた。

「おーい、ノルネ？ 居るか？」

「……なんでお前居る」

「アルモニスからお前を風呂場から引きずりだせとお達しが下ったんだよ。面倒だから出てきてくれ」

「……あのくそ陛下が……くそ死ね、ウザい」

「ここら、言葉がすぎるぞ。あの変人は変なとこだけ地獄耳だからな、聞いてたりすると狙撃されるとぞ」

「むか。狙撃手のわたしに言うな、ウザいから」

「事実だろ？」

呆れた声で肩を竦めたウォルターに、バーメリンが湯をはね散らすような音を立てて反論してきた。

まだ浴槽の中か、と思いつつ脱衣場に入る。

「ほら、出てこいよ、頼むから」

「…あのくそ陛下の命なんてどうでもいい。狙撃ならこの間の汚染獣にしろ。わたしは悪くない」

しぶといバーメリンに溜息をついて、どうしたもんかと腰に手を当てた。

少し前……バーメリンがここにこもる前、ようするには汚染獣とバーメリンが戦った時、なんでも体中が汚れたんだとか。

普通の人間であつたら風呂に入つてそれで終わりなのだろうが、バーメリンは極度の潔癖症の為薄らかにでもそのにおいがすることに耐えられないらしい。

「でもほら、この間とかもアルモニスにやらされてただろ、土木作業的なもの」

「あれも最悪だった。胸くそ悪い。わたしにあんなことさせるとか頭イカレてる」

「……言うねえ……でもお前はいいだろ、狙撃して真つ二つに割ればいだけだったんだから」

「そういう言い方ウザい。なにがいいのかさっぱりだし、くそ死ぬ、お前」

「おいおい……。……そのお前が狙撃したのをキャッチしてたの誰だと思つてんだ」

こもる更に前、喧嘩で庭園を破壊したバーメリンとサヴァリスが庭園の邪魔な折れた草木などの回収にあてられ、処理所が遠いために、庭園からアルシエイラが木などを（面白がつて）投げ、それをバーメリンが狙撃してサイズを小さくして、割れた破片をすべてサヴァリスとウォルターが回収に当てさせられたのだ。

ちなみにウォルターはその日の警護当番だった為に巻き込まれただけだった。

「怒り狂つて乱射すつから、掴むの大変だったんだぜ？」

「うるさい。アレの原因はあのにやけ顔の変態サヴァリスにあるからわたしは関係ない。大体あのくそ陛下が……」

「わかるけどなー。あ、そういえばこの間もさ……」

「あれはウザかった」

「だよなー」

どこからかアルシエイラの悪口のを共感する話になつてしまい、ウォルターは一瞬本来の目的を忘れかけていた。

「……って、アルモニスの悪いところなんてどうでもいいんだって。そんなの探したらいいところ割あるかないかでほかすべて悪いところなんだからよ。出てこいって、ノルネ」

「あんたもなかなか言う。くそ陛下の言う事なんて放っておけばいいんじゃないの？ 大体あの陛下のにやけ顔本気でキモい」

「……………つく」

「あ、笑った」

「つく、いや、その気持ちはちよつと分かるけど……………けど、出てこいつて、ば……………ぶふっ」

迂闊だった。

バーメリンが言ったにやけ顔、それをウォルターは下町で遊んでいる時のアルシェイラの顔で思い浮かべた。

あれは、すごかった。

往來で人の胸を揉むとか凄まじいと思った。

「つちよ、やばい、腹筋痛いし……………」

(……………あんた達、楽しそうね)

「……………げっ」

バーメリンの引きつった声が聞こえた。

念威端子を通じて聞こえたのはいま話しかっていた陛下、アルシェイラの声だ。

(ウォルター、あんたには連れ出せって言っただけ?)

「…いやあ、男に女のこの状況を引きずり出せとかむずいだろ」

(うるさいわね！ 女だと思わなければいいでしょ、どうせ絶壁よ！)

「誰が絶壁だ、このチチデカ！」

「ここら、ふたりとも不謹慎な発言はやめろよ」

アルシェイラとバーメリンが胸の話で言い合居中、これを聞いているのであろうデルボネにしても微笑ましく笑っているのだろうと、男としてウォルターは自身がどうするべきか酷く悩む。

(なによウォルター！ あんただってどうせボインが好きなんでしょ！)

「知るかよ……………」

「むかつ。そんなチチデカにできることなんて限られて来るでしょうが！」

(なにが出来るか言ってみなさいよ！ 女は見た目でしょ！)

「中身も伴わせろ!!」

はあ、とウォルターは盛大に溜息を吐いた。

「オレは別にそんな事考えたことも無いんだけど………」

その言葉と同時に、念威端子から怒気がほとばしった。

（だったら仲良く消え去れ!!）

馬鹿たれ、という言葉とともに、王宮から的確に剽弾がバーメリンの家を直撃した。

アルシエイラからの剽弾によりバーメリンは洩々外に出る事になり、ウォルターはアルシエイラが破碎させた家の修理にかりだされた。

「あんだほんとになにさせたいんだ……」

（まったく……）

「それはこっちのセリフだ」

咄嗟にルウが領域を発生させてくれた為、ウォルターとその周辺だけは剽弾による破壊はされなかった。

その為びんぴんしているウォルターに悪態を吐くアルシエイラだが、正直こっちが言っつてやりたい気分だとウォルターは念威端子を睨む。

（バーメリンには仕事頼みたかったのよ）

「だったら真っ裸で路上に放り出すとかぐらい言えよ」

（その手があつたわね。今度こういうことあつたらそうするわ）

「おい」

（できあ、ウォルター?）

「あ?」

（結局アンタ、どっちが好きなのよ）

アルシエイラが懲りずにふってくる話題に、ウォルターは無視するとうるさいので一応考える。

だが、やはり考えつかない。

その為、投げやりに言っつてやった。

「そのままのお前らが好きだよ」

「どうやらアルシエイラの後ろでバーメリンが聞いていたようで、「キモツ!!」という声が聞こえてきた。」

「ウォルターは空笑いをこぼして、溜息混じりに止まっていた作業を再開させた。」

「災難はいつもこいつから」

「(こいつら、ほんとにどうしてくれよう)」

「(イライラしながらもこめかみを押さえてオレはそんな怒りを堪える)」

〈天剣時代〉 平和は日常ではなく一瞬のものにして瞬間。

「なあ、エルメン」

「……………どうしたの？」

ふと、ウォルターは目の前に来た同僚の天剣授受者、リヴァース・イージナス・エルメンに声をかけた。

今日は汚染獣戦も無くアルシエイラも暴れていなくて平和な日。その上よく晴れた日だ。だからウォルターはこうして庭園でひなたぼっこをしていた。

もつと言えば、天剣授受者で一番温和なこのリヴァースと居ることは、天剣授受者になってから一番落ち着ける時間だと言っても過言ではない。

平和は日常ではなく一瞬のものにして瞬間。

ウォルターは、自身が問いかけたことにより振り返った小柄で、ふくよかな体型をした目の前の同僚、リヴァースに少し間を開けたから問うた。

「ちよつと気になっただけだからいいんだけどよ、唐突な質問、リヴァースとカウンティアってどういう経緯で恋人になったんだ？」

急な質問にリヴァースが少し眼をぱちくりとしばたかせ、首を傾げた。

「…唐突だね？」

「うん、だから唐突だって言っただろ」

「……………んん、そうだなあ」

リヴァースはそのつつけばぷにっとした感覚が返ってきそうな頬をやや朱に染めながら答えた。

「色々あって、都市戦で再会して……………それで一緒に都市を出たかな」

「……………それ、経緯の説明にはなっていないような……………」

「あれれっ」

「……………」

この人は相変わらずだなあと思いつつウォルターは言葉が紡がれるのを待つ。

よく晴れて空がキレイな今日この頃、この庭園はそよそよと柔らかな風がゆったりと通り抜けていく。

「そうだなあ、でもはつきりと言える時期はないんだ。きつと、一緒に都市を出た時から惹かれてたんだよ、ティアに」

そうにこのことウォルターに言うリヴァースだが、ウォルターは「ふうん」と生返事を返した。

カウンティア・ヴァルモン・ファーンネス。

それがこのリヴァースの恋人の名前。

悪い女性ではない。

活発的で快活としていて明るい。好印象が多い女性だ。

だが、そんな彼女は武芸者としてはやや何処かかけていて、天劍授受者になれるほどの実力者でなければやっていけないであろう人物でもある。

攻撃に特化した彼女の攻撃は、防御というものを一切欠いている。

このリヴァースの鉄壁の防御……金剛剋という剋技だが、それがなければ危険な程だ。

それに、彼女はリヴァースに近づく女性にも攻撃的である。

優しくて好印象のあるリヴァースに近寄ろうとする女性は、恋人のカウンティアによって撃沈される。

それでもカウンティア自身、リヴァース以外に興味はなく、一途な女性だ。

そういうところは素直であるし、実際リヴァースには甘えたがりなんだとか。

「まあ、それこそ惚れたから感じるものってのがあんなのかなー?」

「さあ…ね。でも、そういうものがあると信じたいね。……ところで、どうしていきなりそんな事を聞いてきたんだい?」

「んん、なんとなく」

「……………う？」

「……………ここに居ると、平和という事を忘れそうになる。というか一般を忘れそうになる」

「…その縛りでいくと一般人はここには居ないような……………」

「そうなんだけどさ……………」

はあ、と盛大に溜息を吐くと、リヴァースが困った顔をした。

ここ最近連日でアルシェイラにいじられたりサヴァリスに無駄に手合わせを頼まれたりして色々と精神的に結構ダメージがきていたのだ。

たまにはゆつくりしたいと思いつつながら、知らずのうちにこぼれおちた質問だった。

「……………たまにはしつかり休まないかね。疲れが貯まると戦いにも響くから」

「……………本当にエルメンと居ると平和だなー」

「えっ、そうかな？」

「うん。オレ本気でいま女じゃなくてよかったと思ってる」

リヴァースは首をかしげたが、正直本当にそう思う。

復唱するが、カウンティアはリヴァース（恋人）に近寄る他の女を許しはしない。

男はまだ許容範囲のようなので、これでウォルターが女だったら確実に休む場がなかった。

「あー……………平和だ……………」

だらりと備え付けの椅子に寝転がって空を見た。

「そう言える日々が続けばいいけどね」

「…あんたの彼女さんは退屈で仕方ないんじゃないか？」

「それはそうかもしれないね」

笑みを浮かべたリヴァースにウォルターは苦笑を返した。

ぽかぽかとあたたかい日差しがさしてきて、そよ風もちょうどいい。

ウォルターはふうと満足気に息をもらす。

「キミがそんな雰囲気なのは珍しいね」

「そうか？」

「いつも何処かぴりぴりしてて、なんだか周りを警戒しているみたいだったから」

「……………そ、か」

また笑みを浮かべた。

ウォルターはリヴァースに、一瞬、仏頂面の知り合いを重ねてしまいそれを瞼の裏にしまい込む。

体躯が似ているからとはいえ、彼とは大違いの仏頂面だったなあ、と思う。

だが……………

「……………そういえば、さつきから向こうにティアが居るみたいんだけど、行ったほうがこれはいいのかな？ ウォルターはどう思う？」

「……………んあ？ ……あー……………どうなんだろう」

なんだかふわふわした雰囲気か漂ってきている気がする。

だから別にいんじやね、と言うとリヴァースに苦笑を返された。

一瞬、物思いに耽りそうになった。

だが、そんなことをしている暇は無い、と、ふっと息を吐いて考えを放った。

「あ……………!! ……こんなところにいたー!」

「げー、アルモニスだ」

廊下の影から顔をのぞかせ、きらきらの笑顔で寄ってきたアルシエイラにウォルターは眉を潜めた。

アルシエイラの後ろには何故か笑いそうなのかなんのかを必死に堪えているカウンティアと、もう一人女が居た。

「げー、ってなによ。まったくもー。ほらっ」

「？」

ウォルターが上半身を起こして首をかしげた。

「クラリーベル・ロンスマイア。ティグ爺のところの孫よ。あんたに会いたいわって言い出したから連れてきた」

「えー」

アルシエイラにそう言われたウォルターが嫌そうに眉を寄せる、し

かし紹介された女、クラリーベルは意気揚々とウォルターの前に立った。

「はじめましてですね、わたしはクラリーベル・ロンスマイアといいます。おじい様やわたしの師から話は聞いています。とても強い武者でいらつしやるとか」

「……師？」

「ええ、あなたと同じ天劍授受者の、トロイアット・ギヤバネスト・フィランデインです」

「……あー……。フィランデインね」

呆れた顔でウォルターが返すと、クラリーベルはきらりと瞳を輝かせる。

「噂通りなんですね、人を名前で呼ばずに家名で呼ぶって」

「……噂になってんの、これ」

「なってますよ？ 興味ないんですか、大衆記事とか、雑誌」

「……んん、新聞なら時々読むけど……、情報収集なら自分でしたほうが早いし」

「さすがですね」

なにがさすがなのか、と思いつながらウォルターはクラリーベルの輝く表情をまっすぐ見ることがだんだんできなくなってきて目線を逸らした。

「私のことは、クララと呼んでください。周りの人からはそう呼ばれていますから」

マイペースに進めるところはティグリスそっくりだと思う。

「……で……？ 来たのには理由があるんだろ？」

「あ、はい！ ぜひ、手合わせしてください！」

「……………却下」

「え——っ！」

クラリーベルの要望を一蹴すると、後ろでリヴァースが苦笑したようだった。

ウォルターが眉を寄せてクラリーベルを見る。

「どうしてですか？」

「面倒くさい、やりたくない、オレはいま眠い。以上」

「どうしてもですかっ、武芸者にとつて手合わせとは鍛錬の一種であつて、強くなく為には必要じゃないですか」

「あのなー……」

「なんですか?」

「オレはお前らとは感覚が違うんだよ。やりたくないのに無理矢理巻き込むな」

「……………じゃあ、無理に巻き込みます」

「おーい?」

クラリーベルが、錬金鋼を取り出した。

「レストレーション」

復元言語を呟くと、錬金鋼はクラリーベルの手の中で独創的な形へと復元される。

「つだあーもー……」

「いざー!」

「元氣すぎるだろ最近の子供は!」

そう言つてクラリーベルが横薙ぎに振るつた錬金鋼……胡蝶炎翅剣をひよいと跳躍して躲し、そのまま後退した。

「おいちよつと待て、ここで暴れるとあとで庭園の片付けやらされるのオレなんだぞ!」

「じゃあやらされてください。行きます!」

「おい聞いてンのか? 頭腐ってるんじゃないのかお前」

「酷いです」

クラリーベルの剽技を躲しながら、結局はゆつくり出来ないのか、と不安要素が増えたウォルターだった。

「それにしてもティア、さつき楽しそうだったね」

「えっ?」

「さつき。凄く笑つてたね」

「ああ、あれは」

カウンティアがリヴァースの言葉に思い出したように笑い出した。物陰からリヴァースとウォルターのやり取りを見ていたカウン

ティアだったのだが、意外にも微笑ましくてうつかり笑いがこぼれた、という流れだったとリヴァースに言うと、リヴァースはふわりと笑みを浮かべた。

「ウォルター最近賑やかだからね」

「陛下が色々といじるからよ」

「そうだね」

「なによ、そのわたしが悪いみたいな言い方は」

話を聞いていたらしいアルシェイラがそう言うのとリヴァースは慌てて首を横に振り、カウンティアはにやりと笑った。

そんな2人に「相変わらずねー」とアルシェイラは呆れて言う。

「まあでも……」

そう呟きアルシェイラは、困った顔をしながらどうしようもなく素手で応戦するだけにとどめているウォルターと、それに悔しそうな顔をしながらも楽しそうに戦うクラリーベルという2人の空中戦闘に視線を向けた。

——あいつかわらず女の子に手はださないのねー……

実際の戦闘となれば別だろうが、こういう場ではウォルターは決して女とは戦わない。

女だから、とか女に手は出せないとか、そういう甘ったれた事ではなく何処か引いている雰囲気があるのだ。

それにアルシェイラは首を傾げながらも笑いながらクラリーベル応援弾をウォルターに向けて放った。

「つちよ、危なっ、あんななにしてくれンだよ」

「クララ応援弾のお見舞い☆」

「本当に面倒くさい人だなあんたは」

「まだまだです！」

「いい加減諦めろお前も！」

この空中戦闘は、クラリーベルの祖父であるティグリスが来ても制止がかけられることはなく観戦に加わられてウォルターはとにかく応戦するだけになった。

結局終わったのは、クラリーベルが力尽きて剄を練ることができな

くなつてからだった。

平和は日常ではなく一瞬のものにして瞬間。

(ここでは騒動が日常)

風邪を引きました。 Version グレンダン

「…………うー」

喉が痛い。

頭が痛い。

頭痛がする。

吐き気がする。

食欲が無い。

咳が出る。

——ああ…………これは確実に…………

はあ、と喉が痛いのを我慢してでも溜息を吐いた。

風邪を引きました。 Version グレンダン

げほつ、と再び咳をすると、ウォルターはいつになく重い身体をずりりと動かして冷蔵庫の前まで行く。

特に必要最低限のものしか置かれていない簡素な部屋は、多少ふらついて頼りない現在のウォルターの足取りでも充分難なく通れる道だった。

「うー…、こんな事なら先に何か買って置くんだった」

なにも無いという訳ではないが、調理をしなくては食べられないものばかりだ。

いつものウォルターには冷凍食品という言葉はない。

基本いつも作る。

その為食材は割と揃っているのだがそれでも作る気力と食欲が無い。

——困ったモンだ

ウォルターはそう考えながら適当に野菜室に入っていたきゆうりをとりだしてかじった。

先端は割と苦味があつていつもなら少し切り落とすのだが、かじつた部分を吐き出すことさえ億劫になり、飲み込むのも辛い。

だがそれでも何か食べない限りは処方された薬を飲むことも出来ない。

ああ、と嘆息する。

「こんな時期に風邪引くとか、ちよつと…オレ…：しつかりしろよ…：オレの軟弱者…」

くそう、と小さく呟いて、ウォルターはきゆうりの最後の一片を口に放り込んだ。

いまの時期は汚染獣が特に活発になる時期だ。

つまり、天劍授受者のかりだされる率が高くなるという事なのだが、どういう訳かウォルターは風邪を引いた、ということだ。

ふらふらと部屋を歩きまわりながら、薬は何処だっけと探す。

「あれ、こつちにおいてた筈なのに」

薬箱をあさつても、目的のものは出てこない。

ウォルターは首を傾げながら薬箱をあさる。

「ん…：あ、あつた…：だーけーどー…：？ 中身ねえじやん」

なんでだよ、と呟く。

今季、ウォルターが風邪を引くのは初めてだ。

それなのに無いというのはどうなのだろうか。

昨年もその前も風邪を引いた覚えはない。

周りにそんな定期的に風邪を引いた人物もいない、となると本当に何故なのだろうか、とウォルターは首を傾げる。

「ああもう…：…」

余計に気だるさが増した気がして、ウォルターは苛立たしげにからの箱をゴミ箱に投げ込み、そのままベッドへと戻った。

「…くっそ」

ベッドに潜り込み、ウォルターは鬱とした気分で枕に顔を押し付けた。

(ウォルター、大丈夫?)

ルウが声をかけてきた。

「あー、平気平気。そんなにえらい訳じゃないから」
(でも、結構辛そうだよ?)

「んー…」

精神体であるルウに風邪がうつる事は無いのだが、だからといって心配をかけさせたくはない。

ウォルターは仰向けに転がると天井を見上げた。

——あー、そういや久しぶりかな

体調が悪いということを除けば、ウォルターがここまでゆつくりしているという事は珍しい。

普段は汚染獣の相手をしているかアルシエイラやサヴァリスをはじめとする天剣授受者達に巻き込まれるというのが基本的なオチだ。

だが今日明後日あたりはそういうことが無い。

正直言うと、暇。

しかしだからといって遊んだりする程体力は無い。
ぐらり、と視界が揺らいだ。

——あー…

ウォルターはやってくる睡魔に逆らう事無く、そのまま眼を閉じた。

「……………」

どういふ状況なんだろう、これは。

真面目にいま、握られている手の感触と、時折聞こえる「声」にそう思った。

風邪でウォルターが寝込んだので、様子を見てこい(つまるところ茶化してこい)と言われて来たのはいいのだが、この状況はいただけない。

切実にそう……目の前に笑いを全力で堪える女王と、無愛想な男を見てサヴァリス・クオルラフィン・ルツケンスはそう思った。

——どうしてこんなことに……

どうしてこうなったのかと、サヴァリスは回想した。

ぎい、と古い扉を開いた。

「陛下は本当にどうやって合鍵なんて入手しているんでしょうね」

溜息をつきながら、手の中に存在するその小さな鉄の鍵を見て呟く。

とりあえず短い廊下を進んでリビングまで向かう。

こぢんまりとしたアパートの一室。

僕からすれば、ここは物置にも満たない大きさの空間。

その大ききの空間の真ん中にぽつんと味気なく置かれたテーブルと椅子、壁際には小さな本棚があり、ウォルターの趣味でもある菓子類のレシピアや手書きの紙がびっしりと入っていた。

リビングとキッチンが合体しており、洗面台のある壁が大きく開き、リビングがはつきり見渡せる形になっている。

「ふうん」

結構綺麗にしているのか、と少し感心した。

陛下……女王、アルシェイラ・アルモニスから聞くメンテナンスの部屋の印象が無駄に強く、ウォルターも汚いのかと思っていたが、意外にもきれいな好きらしい。

部屋には必要最低限のものと、本当に少量の個人的な私物。

それだけだ。

綺麗にしている……というよりは、散らかすものが無いほど殺風景なのだ。

僕はともかくとリビングを見渡す。

ふと、テーブルの上に箱が開きっぱなしで置かれている事に気付いた。

箱を見やれば薬箱。

——風邪薬でも飲んだのかな？

そう首を傾げつつ、ふと目についたゴミ箱を見た。

「……あれ」

僕は更に首を傾げた。

——箱は入ってるけど、薬の袋らしきものは無い？

「……ううん」

ここまでする必要は無いんだろうけど。

そう思いながらキッチンを覗き、ちらとそこにあつたゴミ箱を覗いたが、やはり薬の袋らしきものは入っていない。

薬箱が出しっぱなしということは、大分疲弊した状態にあると考えた方が良い。

だが、それでも薬の袋が見つからないと言うことは……

「飲んで……無いのかな」

そうなると色々面倒なんじゃないのか、と僕は溜息を吐く。

しかし、そうなると何処に居るか。

考える場所はひとつだ。

「寝室……かな」

部屋を見渡し、それらしき部屋を開く。

静かに開くと部屋は暗がりになっていて、部屋の隅……窓際にベッドがひとつ置かれた簡素な部屋だった。

——あたり

寝室だ。読み通り、ウォルターは眠っているようだった。

——そういえば……

す、と嗅覚をきかせた。

気にしていなかったが、ここは他人のにおいがしない。

いや、この家自体がウォルター自身のおいしかしないのだ。

ウォルターの家なのだし、それは当たり前と言えば当たり前である。

だがしかし、それでも多少なりとも他人のにおいというものは移り香するものだ、しかしウォルターの家にはそれが無い。

——それだけ交流が少ないって事なのかな？

僕はそう内心思いながら殺戮をしてゆっくり歩み寄る。

「……ん」

ウォルターがこちらに寝返りをうつた。

少し息が荒いか、と思う。後はやや頬が赤いか、と思う程度。僕はそろそろと近づき、ウォルターの額に手を当てた。

「……………」

「……………」

—— 凄く熱いんだけど……

随分酷いようだ、と肩を竦めた。

とは言え僕にはなにをしたらいいのかわからない。

むう、と唸りながらウォルターの額に当てていた手を顎に持って行くようにすると、急に手を掴まれる。

「?!」

驚いて一瞬固まった。

うっかり固まった。

この場に居るのは僕……サヴァリス以外にはウォルターしか居ない。

つまり、手を握ったのはウォルターしか居ない。

まさかお化けが居るだとかそういう事は信じない質、そんな展開はありえない。

握られた手を見やると、やはりウォルターが握っている。

「……………」

あまりの事に言葉が喉で詰まってなにも出てこない。

絶句、だ。

こんな所で人生初の絶句。

いや、そんなことはどうでもいいのだけれど。

「……………ウォ……ルター……う？」

恐る恐る声をかけてみるが、なにも反応は無い。

ウォルターは手を握ったまま眠っている。

何よりも、驚きでなにもできない。

「……………ルウ」

「……………」

……いや、別に……いいんだけどね？

僕としてもこれはちよつとなんとも言い難い状況だ。

どう反応すればいいのか……いや、反応しなくてもいいのか？

いや、それともこれは試されているんだろうか。

いいや……もしかすれば……

(動揺しすぎでしょ)

「っ?!」

ウォルターに握られていた手をうつかりぎゆうつ、と握ってしまつた。

(つぶ)

「だ、れだい……っ?」

この部屋には、他に誰も居ない。筈だ。

それなのに、声が聞こえる。

いや、聞こえるという表現は適切では無い。

頭のなかに直接響いてくるような、そう……言い換えれば念波のよ
うな感じだ。

こういう奇怪な現象は正直好きじゃない。

怖いとかそういう以前の問題で、鬱陶しい。

じとり、と周りを見渡すが、やはり誰も居ない。

「……………」

(警戒したつて見えないよ、僕は)

楽しそうな笑い声が聞こえてくる。

落ち着いて問いかけて見る事にした。

「……キミは、誰だい?」

(ん? 警戒しなくてもいいよ、悪いヤツじゃないし)

「……………」

(あははっ、本当に用心深いね。大丈夫だって言ってるじゃないか。
ウォルターに危害を加えるような事は絶対にしないよ)

声はそう告げる。

——つまり、僕の保証は無いつてことか

僕はどつちかといういまはよくこんな部屋に住んでいるなどそればかりだった。

(それよりね、ウォルターだったらきゅうりしか食べてないんだ。薬も飲んでないしき。なんとか食べさせてあげてくれないかな)

「……それはいいけれど、さつき見た所では風邪薬は無かったようだよ?」

(ん、ウォルターが見たのって薬箱の方なんだ。予備があるんだ。本棚の一番下の段の中だよ)

「……それ、ウォルターにはつきり言ってあげたほうが良かったんじゃないのかい……」

(だってウォルター疲れすぎてたみたいで、僕の声あんまり届かなかったんだよ。僕は悪くないよ)

「……………」

はあ、と溜息をついて、僕はウォルターの手を解こうと開いていた手で握っていた手を剥がそうとしたのだが、逆に更に掴まれた。

「……………」

どうしろと。だから。どうしろと僕に言うのか。

薬を飲ませろというなんだかよく分からない霊的な声、そして何故か僕の手を離してくれないウォルター。

どうしろと。

こういうパターンは僕にとってさっぱりわからない。

僕は、こういうパターンにはなったことが無い。

だから、どうすればいいのかわからない。

「……………」

どうしようかと悩んでいると、ハイテンションな女性の声と、不機嫌な馴染みのある雰囲気が出てきた。

「はーいー… どうどう?… 寝てるーっ?」

「……………」

「……………」

「……………」

固、まった。

「どうして来るんですか……」

やってきた女性……アルシエイラ・アルモニスとリンテンス・サーヴオレイド・ハーデンを睨んだ。

「だって、どうせあんたのことだし看病なんて出来ないと思うし。そう思っていたらあんな状況……ふっ……」

「……………リンテンスさんもじつとりしたその目線やめてください」

ウォルターの捕縛から逃れたサヴァリスはアルシエイラが買った品々を覗き見、本棚の下から指定のあった風邪薬を引っ張り出した。

「あら、そんなところにあるの？ 変なところにしまってるのねえ……。……というか、あんたなんで知ってるのよ」

「……………え。教えてもらいました……」

「あ、っそう」

特に問いに意味は無いらしく、アルシエイラはつまらなそうに椅子に腰掛けた。

リンテンスは部屋の隅で何処かに視線を泳がせている。

おそらく煙草を吸いたいのだろうが、どうやらウォルターがいつも嫌がるせいで吸えないらしい。

サヴァリスがどうしようかと悩んでいると、がちやり、と寝室のドアがあいた。

「……………あれ？」

「ウォルター。起きたのかい？」

「ん……まあ……」

「薬、飲んで無いんだろう？ いま薬出したから、適当に飲みなよ」

「ん……」

ウォルターの足取りはおぼつかない。

サヴァリスは溜息を吐く。

「ほら、さっさと戻りなよ」

「……粉薬はいらん……」

「文句言わない。ヨーグルト、陛下が買ってきてくださっているよ」

「あく？ ヨーグルト…？ ……いちご」

「いちご…？？ あ、あるよ」

「…それならいける…」

分かったと頷くとウォルターは静かに寝室に帰って行った。

アルシエイラがにやにやと笑っている。

サヴァリスは困った様子で肩を竦めた。

「意外に世話焼きなのね」

「そういう訳では…」

—— 僕の身が危険だし

サヴァリスは今日何度目かわからない溜息をついていちご味の

ヨーグルトと薬、スプーンを持って寝室へと入った。

「ウォルター？」

「んあ？」

「寝てればよかったのに」

「それは凄く賛成だ」

咳をしながらウォルターは眉を潜めた。

「じゃあヨーグルト……」

「待て」

「うん？」

「うん？ じゃねえよ、なにしてンのおまえ」

サヴァリスはぐるぐるとヨーグルトをスプーンで混ぜている。

普通はある程度のかたまりで掬える筈のヨーグルトはスプーンの

端っところからぼたぼたと垂れている。

「粉薬だから…混ぜるなら混ぜないと……」

「そうだけど。そうなんだけど。べったべったにしちゃだめじゃん」

「…んん。看病初心者の僕にそんな事言われてもなー」

「面倒くさいなこのご都合主義」

「ほら」

サヴァリスはそう言っつてヨーグルトをつきだして来る。

ウォルターは渋々受け取り、スプーンに手をかけた。

そのところで、アルシエイラが扉から顔をだす。

「ウォルター、ヨーグルト持ってきたわよ」

「え？ ああ……。……。ん？ ちょっと待て、だからなんでお前もヨーグルト混ぜてるんだ」

「いいじゃない！ だってどろどろの方が食べやすいでしょ？」

「かたまりの方が食べやすいだろ、どう考えても」

アルシエイラまでもが高速でヨーグルトをぎゅんぎゅん混ぜている。

「だから混ぜたらだめだろってば」

「そう言わないの。こっちの好きにさせなさいよ」

「あんたらに好きにさせてたらオレ死にそうだからヤだ」

ウォルターはそう言いながらやはり眉を潜め、とりあえずサヴァリスに渡されたヨーグルトに口を付けた。

「大体あんた、いちご味なんて子供すぎでしょ」

「味付けくらい好きなの食ってもいいだろ」

「そりやそうだけどね、いやあ、意外だわ」

「……………」

じとつ、とした目線でアルシエイラを睨む。

ウォルターは二口目を食べると、アルシエイラに「そういえば」と問うた。

「あんたら、なんで来たんだ？」

「はあー？ 心配したからに決まってるじゃない」

「……………あんたらしくねえな」

「うっさいわねー」

「ハーデンの方は？」

「……………引きずられてきた」

「……………ご愁傷様……………」

ウォルターは乾いた笑いをこぼすとヨーグルトを食べる。

「……………というか、あんたらには看病されてるって感じしねえわ」

「そうねー。だって看病の仕方なんて知らないし」

「あんたら本当になにしに来たんだ」

真顔でそう言うところアルシエイラは片目を閉じて舌を出した。ウォルターは頬をひきつらせて引きつった笑いを浮かべた。「いや、なにしてんのあんた。本当に」

ウォルターがそう呟いたと同時に、家の玄関が開く音がした。

「どーもさく！ ウォルター？」

「あ……、ライアだ」

「ライア？」

アルシエイラが首を傾げた。

ウォルターはヨーグルトをサヴァリスに渡してベッドから立つ。

「ハイア・ライア。サリンバン教導傭兵団のヤツ」

「…あー、この間行けって言ったときのヤツね」

「そうだよ」

ウォルターがリビングの方に向かうとハイアが居た。

ハイアはウォルターを見てぱつと表情を輝かせた。

「ウォルター！ ……あれ、調子悪いさ？」

「ちよつとな。風邪で」

「じゃあちゃんと寝てなきやだめさ！ 薬は飲んだのかさ？」

「一応……ふた口くらい」

「薬って一口ふた口だけ……？」

ハイアがきよとんとした様子でウォルターを見た。

「あー、ヨーグルト」

「ああ、粉薬かさ？ ウォルター粉薬嫌いなのかさく？」

「嫌い」

「そ、そう……。というか、他にも人居るんさ？」

「居る。天劍授受者と女王が」

「………なんという豪華メンバー……。ともかくさつさと寝るさ。それが一番さ」

「そうだけど」

ウォルターは眉を潜めて寝室の方をみた。

ハイアは何故ウォルターが眉をひそめるのかが分からない。

「どうかしたさ？」

「あいつらの居る所で安眠できるまで精神図太くない」

「……………それは……………なんとも言えないさ……」
「だよな……」

大きく溜息をつくとき、ウォルターは「しょうがねえ」と一つ呟いて、
寝室に戻った。

「あ、居た？」

「居たよ。てか、あんたら帰れ本当に」

「えー」

「騒がしいから寝れないんだよ」

「ひどいー！」

アルシエイラが不服そうに頬をふくらませた。

それでもウォルターは面倒くさそうに溜息をついてアルシエイラ
を睨んだ。

「お前らは…………。来てくれたのはありがたいと思うけど、そこまでき
れても困るわ」

「……………しょうがないわねー」

「……………」

ようやくどいてくれた事に安堵したのか、アルシエイラ達が寝室か
ら出るとすぐに寝たようだった。

「さすがに疲れていたみたいね」

「そうですね」

「みたいさ…………」

「で、あんたがハイア？」

「あ、そうさ」

「ふーん…………」

ハイアはアルシエイラにじっと見つめられ、ややたじろぐ。

「ま、いいけどねー」

（陛下、ようやく見つけました）

「うわ、カナリス」

（うわ、とはなんですか。探したんですよ。業務が残っています。王
宮にお戻りを）

「やだー。これからわたし学校ー」

(陛下……)

念威端子から響く呆れた声を流し、アルシエイラは逃げるように去っていった。

引きずった張本人が居なくなった為、リントンスも帰った。

ぽかんとしたハイアと、やれやれと肩を竦めるサヴァリスが残され、2人はちらと視線を合わせどうしようかと考えた。

「……とりあえず……」

ハイアはちらと寝室を覗いた。

ウォルターはようやくよく眠れているようで、ハイアは少し胸を撫で下ろした。

「じゃあ、僕も帰ろうかな。後は頼むね」

「……あ……了解……さ」

サヴァリスもハイアに言葉を残して去っていった。

ハイアはやはりあつけにとられてぽかんとしたままで居た。

「……………」

ハイアはそろそろと寝室に入ると、ウォルターによった。

いつもならすぐに起きるのだが、今日はそういう事は無いようだった。

——いつも頑張ってるから、かさく…

疲れているのだろう、とハイアは笑みを浮かべた。

「…おやすみ」

ハイアはゆっくりと起こさないように寝室を出た。

「……………」

来ていた事に気付いていたものの、寝たふりをしていたウォルターは微かに笑みを浮かべて再び眠りについた。

風邪を引きました。 Version グレンダン

(やっぱり騒がしいけど、たまにの平穏がやってきた)

背徳の両手

ああ、面倒がやってきた。

オレはルウの領域から伝わってきた感覚に、ひとり眉をひそめた。

たまには、許してくれよ

自室で寝そべっていたウォルターは、枕元に置いておいた紙切れを拾いながらルウに声をかけた。

——ルウ、この反応って……

(うん、面倒だよ)

面倒というが、実際は「事」の事をささず、ただの単略称である。そしてその単略称が今回指す反応は汚染獣ではなく、人間だ。だがその人間は面倒な人間だった。

ただの旅行者や一旦の停滞者ならまだ良いのだが……
ひらり、とウォルターは数日前に見つけた1枚の紙切れを見た。

——……連続殺人犯ねえ……酔狂なヤツだ

(そうだね、ここに強者が2人も居るなんて知らずに)

——いま、まだツエルニに居るライアも合わせたら、3人かな

(ん、それもそうか)

最近、連続しておかしな事ばかりが起きる為、ルウの領域は常時ツエルニを包むようにして展開されている。

とは言え、それは察知するのみであり、それを排除するのはウォルターの役目だ。

ウォルターはそれに小さく溜息をついてルウに話しかけた。

——面倒だからそいつだけ消してくれたりしねえ？

(しないー。だって格好いいウォルターみたいもん)

——……いやいや、つつたって、殺るだけだぞ？

(いいじゃない、昔からやってきたでしょ?)

——そう言われるとなにも言えないのもなんか悔しい……

ウォルターはもう一度溜息を吐いた、そして紙切れをぐしゃぐしゃに丸めるとゴミ箱に向かって投げる。

かたん、と音がして、丸められた紙切れはゴミ箱に綺麗に収まった。ウォルターは立ち上がってクロゼットの奥から引きずり出した。

「…それにしてもどうする？ 会長に言うべきか、これは」

（大事になりそうだしやめておこうよ。さっさと殺した方が早いよ、絶対）

「……それもそうか……」

ウォルターは昔使っていたマント——汚染物質遮断素材の割といいものだ——をクロゼットの奥から引きずり出し、ぱたぱたと埃を払う。

「おし、これ使えるな、まだ」

（もう使わないの、それ）

「まあ、どうせこれ支給品だったし、捨ててもいいだろ」

（そうだけど。破れても無いんでしょ？）

「そりゃあな。割と大事に使ってたモンだし……。けど、顔が割れるよりマシだ、これ使おう」

考えついたら即行動。

ウォルターはそれを適当なポーチに詰め込んで、窓から飛び出した。

ルウが補足してくれているだけあって、殺人犯は早くに見つかった。

路地裏に逃げ込んだ殺人犯の前に、マントを羽織って降り立つウォルターは、静かに目の前の男を見据えた。

「てめえ……サツか？」

「……………いいや？」

「…じゃあなんだ？ 正義のヒーローツラした、偽善者野郎か」

「……………」

錬金鋼はまだどちらも復元していない。

ウォルターは片目だけをフードからのぞかせて、沈黙を宿す瞳を向けた。

「……そういうよく分かんねえ眼が気に入らねえんだよ、てめえ！」

「……あまりがなると、あたりに響くぜ、その声」

「…………………オレを殺す気か」

「…生かす価値の無い屑ならな。酔狂な殺し屋だと聞いた」

「そうさ、オレはオレを見下すヤツらが嫌いだ。だから殺す、だから殺した。それじゃあだめか」

「……………」

「お前がオレを殺せば、お前はオレと同じってことさ」

男の言葉にウォルターは耳を傾けていなかったもの、なにもいわなかった。

「理由はどうあれ、世の中殺しっただけで軽蔑される。お前もオレも同じだ。同じ『殺す』って思いをもってるんだからな」

「……………」

そう言いながら、男は何処か不信感を抱き始めたらしい。

普通、正義感を持った人間というのは反論する。その筈だ。

しかし、ウォルターはなにも言わない。

——オレは、正義じゃないからな

「なんだ？ それとも、自分が悪だと思ってるのか？」

「……………いいや……。オレは、正義でも悪でもない。そして、中立ですら無い」

「……………」

「……お前は一体、何人、どうやって殺してきた？」

ウォルターの突然の問い。

男は迷ったようだが、やや低い声で呟きはじめた。

「二人目はオレの妻だ。いつまでたっても変わらない、見下したあの眼。あれが気に入らなかった。だから殺した。この錬金鋼で真つ二つにして、まだ生きてる上半身の方を八つ裂きにした」

泣き叫ぶ妻。

その「人を殺す」という事への背徳感と、そしてその背徳感を行き

過ぎた快樂。

殺しへの歡び

「二人目も似たような理由さ。近隣に住んでた、オレを蔑んだヤツ。1人殺したんだからもうひとり殺しても変わらない。だから殺した。左顔面に鍊金鋼を突き立てて、そのまま捻り切った。痛みに呻くヤツを見ながら、何度も刺した」

男の言葉は続く。

ウォルターはそれに聞き入る訳でもなく、ただ淡々と聞いていく。

「……それですべてだ。……これを聞いてどうしたかったんだ、お前は」

「……………オレが、どれだけ異常なのか知りたかった」

「……………?」

「…お前に話してもしようがないだろうが…オレはお前以上に殺してきている。この手は…善悪を捨てて、すべてはただ赤に染まった。善も悪も、すべて赤に塗りつぶされた」

「じゃあ、お前にオレは裁けない」

「そうだ。オレはお前を裁く気なんて無い」

ウォルターが言い切った。

じゃあ何がしたいのかと、男がウォルターを怪訝な眼で見してきた。

「……………薬殺、絞殺、斬首、撲殺、圧殺、刺殺……」

「……………?」

「…窒息、轢殺、焼殺、爆殺……」

「な、なにが言いたい」

ウォルターは小さく呪詛のように呟く。

男はそれにうろたえ、ウォルターを異常な眼で見た。

「……………オレは、それ以上の殺し方で人間を殺してきた。すべてを合わせればきつと100はくだらない」

「なら、お前にオレは裁けない!」

「……………言った筈だ、オレはお前を裁く気なんて無い、つてな」

そう言ったウォルターが腕輪を弾き、刀を復元させる。

途端に男の顔に恐怖が走り、男も鍊金鋼を構えた。

「…やるのか」

「……すでに怖気づいた剣に興味は無い」

「なめるな!!」

男が錬金鋼を振りかぶり、だらりと刀を下げたままのウォルターに向かつて一直線に振り下ろした。

——遅いな

ウォルターは刀を一閃させ、男の首を跳ね飛ばした。

背後に重い物が落ちる音が響いて、目の前の首のない胴体が地面に赤い液体をまき散らしながら倒れるのを冷めた眼で見つめていた。

赤が着ていたマントに付着したのを見て、「捨てないとな」と小さく呟いた。

地面に広がる赤が、ウォルターの靴のつま先にあたった。

ぴちやん、と小さく音がして、ウォルターはその音を酷く耳障りに思った。

——……汚い……

ウォルターは一步下がり、その赤を見た。

段々と持っていた熱を失いつつある身体。

薄ぼんやりと酩が見える。

それでも尚、ウォルターの冷えた視線は変わらなかった。

——ルウ、消してくれ

(いいの?)

——外に捨てるのも面倒だ

(どうせマント捨てに行くくせに)

ルウの呆れた声を聞き流しながら、ウォルターはその場を悠々と通り過ぎる。

背後で、音もなく死体は消えた。

外縁部に到着したウォルターはマントをさっさと外に放った。

大体のものは外に放れば回収は不可能、証拠としても立証されない。い。

マントがはためくのを見ながら、ウォルターは踵を返した。

(まだなにか考え事?)

——ん……まあ、な

(あまり考え過ぎないようにね)

—— そりゃあ。だって疲れるし

ウォルターは店が立ち並ぶ商店街あたりにやってきていた。

あたりは活気に満ちていて、何処か浮き足立っている。

そんなところを脇目もふらずに歩いて行くウォルターは、自らが異質な感触を覚えていた。

異質な、ではない。異質なのだ。

—— そう、ここに居ること自体が、異質

どうしてここに居るのか。

それはわかりきっている。いまも昔も変わっていない。

ここにいる人間とは、一緒に居ると言いながら居ないのだ。

関わっていると言いながら関わってないのだ。

よく分からない感覚……それを何かと感じ取れては居ないが、その感覚が胸を圧迫する。

「……………はあ」

ウォルターは大きな溜息をついて、特にはつきりとしめない感覚に眉を寄せた。

すると、後ろからやや自分より低いであろう身長的人物に頭を叩かれた。

「…いて」

「なに周りの人ににらみかかせてるんですか」

「……………アルセイフ……………?」

「…なんですか? ……というか、あなたが後ろ取られるなんて珍しいですね」

「あー……………いや、まあ。考え事してて」

うしろから現れた人物、レイフオンの顔を見てウォルターがきよとんとした表情を返した。

ウォルターの言葉にレイフオンがふうん、と空返事を返して、ウォルターを見た。

視線を向けられたウォルターは、どうするべきか図りそこねて、とりあえずレイフオンが抱えていた買い物袋をウォルターが持った。

「……なんです」

「え？ あ、いや……なんか持つておくべきかと」

「……………」

ウォルターが何処か遠い目をしていることにレイフォンが気付いたのか、特になにも言わなくなつた。

静かに何処に歩いて行くという事も特に分ならず、レイフォンについていくだけのウォルターは、ただ思考に耽つた。

ウォルターは、純粋な武芸者では無い。

だからこそ、いざという反射神経は元々ウォルターが持っている身体能力と、異界法則によって強化された部分のみとなる。

つまり、一瞬の隙をつかれた場合ウォルターは無防備そのものということだ。

——オレもまだまだだな

真正面からの戦闘では負ける事は無いのだが、と思ひながら左手に持ったレイフォンの荷物の重みが先程まで持っていた刀の重みに似て、ウォルターの胸の圧迫を増長させた。

「…ウォルター、いつまで黙つてるんです？」

「え？ あ」

すでについた場所はレイフォンが住んでいるアパートの扉の前。

レイフォンが訝しげな顔をしてウォルターの顔を見た。

問いを投げられているにも関わらず、ウォルターはやはり遠い眼をしてレイフォンの言葉には答えない。

「……………」

レイフォンが眉を寄せ、ウォルターの上着の服を掴んでそのまま部屋に引きずり込んだ。

「うわっ」

「もう、いつまでぼうつとしてるんですか。そこに立つたままですられると、いろいろと僕が変なふうに見られるでしょう」

「……………悪い」

レイフォンはさっさと突っ立ったままのウォルターの手から買い物袋を奪い取ると、ウォルターを乱暴に椅子に座らせた。

ウォルターは俯いたまま考え事に耽っていた。

いや、考えと言つても耽るようなことでも無く、耽つてもどうしようも無いことなのだ、それでも考えてしまうのだ。

あの男に対して、謝礼の言葉などというものは無い。

すでにあの男はウォルターに対して一歩引いた体勢をとっていた。命のやりとりをするという場で、あの程度のヤツならば殺されても当然だ、そう思うのがウォルターである。

……………今更、殺したことに對してなにか抱くことなんて無い

それならば今までの行為は何だったのかという事になる。

いままでさんざん同じような事はしてきた、これ以上に非道な殺し方も。

それでありながら、今更こうも考えに耽る理由は……

そう考えていると、いつの間にか隣に座っていたらしいレイフオンにぐいつと引っ張られ、膝枕状態に持っていかれる。

……………え……………と
……………?」

「……………いいから黙って寝てください」

「……………それはいいが……………高さが……………あと固い」

「うるさいですつ、僕だって男なんですから仕方ないでしょう」

「…………………………それもそうだな」

「納得されるとそれはそれで腹がたちます」

レイフオンが眉を潜めた。

そんなレイフオンに苦笑を返しながら、ウォルターがほんの少しだけ微笑む。

「……………さんきゆな。すぐ元気になれるわ、これなら」

「…………………………それなら……………よかったです」

「……………おう」

小さく返事を返し、ウォルターが静かに眼を閉じた。

レイフオンはようやく落ちつけたか、と溜息を吐いた。

——いつも、疲れているから……たまには、ね

本人には決して言ってやらない。

そう決めているから言わないけれど、ウォルターの事を尊敬しているレイフオンとしてはウォルターが悩んでいる時に支えになりたい。

ウォルターが辛い時は助けてあげたい。

そう思っているのだ。

——絶対に言ってやらないけど

言うのは気恥ずかしいし、と少し頬を掻きながら思う。

ふと膝枕をしているウォルターを見ると、すや、と寝息を立てて眠っていた。

——珍しいな

そう思うと同時、それだけ疲れていたのか、とウォルターの顔にかかっていた髪をさらりとすくい、流した。

少し体勢を動かしたウォルターだったが、落ち着いたのか小さく寝言を言っただけだった。

——……大変だ、またとても大変な事を思った

レイフオンは、おう……と小さく自己嫌悪にかられて顔を押しさえた。だが……、とちらりと視線をウォルターに向けた。

ウォルターは少しむずかしい顔をしながら何やらむにやむにやと言っている。

——……でも……、まあ……いいか、今日くらいは

「ウォルター……、たまには僕を頼ってくれていいんですよ。いつだつて、支えたいんです」

ウォルターがこうやって休む事も、レイフオンが似合わない事を思うのも。

すべて無かったことになる。

自分も休もう、そう思ってレイフオンは静かに眼を閉じた。

——……こいつ……

ウォルターは触られた為に起きたのだが、レイフオンの眩きにやや

動揺を隠せなかった。

いつもああも生意気に態度を取られていた為、内心でレイフォンがどう思っているかを把握しきれていなかったという事だろうか。

それとも、ウォルターは表の表情しか見て居なかったということだろうか。

答えを出すには些か疲れすぎていたウォルターは、しかしそのまま瞼を閉じ、眠りに落ちる。

たまには、許してくれよ

(辛いことは多くあるけれど、それでも人の優しさに触れるたび信じようと思うんだ)

(辛いことがあるなら、支えてあげたいと思うよ。素直になんて、いつもなれないけれど)

先輩と菓子事情

「あ。よう、ドロンじゃねえの」

「あ…、ウォルター、先輩」

オレ…：…エド・ドロンは驚いた。

いや、彼がここにいること自体はおかしい訳ではない。

彼はこの学園でオレの先輩だし、オレの友達（だとあまり思いたくないモテるヤツだが）の小隊の先輩でもある。

しかしこの先輩、意外にも変わった趣味…と言うか、好みがあるのだ。

この人、イケメンとか男前とか言われるが、以外に乙女趣味だったりする。

「アルセイフは一緒じゃねえの？」

「そういつも一緒って訳じゃないですよ」

「そうか？ ……まあ、良いんだが…」

先輩はふむ、と手をあごに当てて考えた。

オレといえば先輩に突如声をかけられて驚愕の一言だ。

彼と一切面識が無いという訳では無く、レイフォンと一緒に居た時に袋いっぱいチョコレートを抱えて居る彼と遭遇した事があった。

その時に色々と話をした（といってもレイフォンがほぼ不機嫌にしていた）だけなんだが。

「先輩はどういう用事でこっちに…？」

「んん、いやあ、いいね、今日は」

「？」

珍しくテンションの高い彼の手には大きな袋が抱えられていた。

「いやあ、今日はお菓子類が大安売りでさー、大奮発しちゃってなあ」

「はあ…：…。作るんですか？」

「うん？ ああ、そのつもりだ」

先輩は珍しくにこにここと笑みを湛えて袋をかさかさ叩いた。

だけど、だからなんだ？ 正直それだった。

そう思っていると先輩が口を開く。

「つてことでさ、ちよつと食べてくれねえかな」

「は…っ?!」

「あ、いや、大量に作るからさー。アルセイフは甘いもの苦手だし、口入はまあまあだしアントークは微妙だし…、消費者が近くにいいねえのよね」

「要するに、食べ、と」

「そ」

にまあ、と笑みを浮かべる先輩はちよつと新鮮で良い感じかと思いきや寧ろちよつと怖いかもしれぬ。

いや、こういう笑みに女子は釣られるのだろうか。

こういう笑みをイケメンがするから、女子はこういうヤツに寄つていく為に余計に女子がイケメンによつて行つてそしてその為にモテるヤツが出来る。

普段のギャップとかそういうものっぽいついていう……

「おーい、ドロン、どうする？ オレだけでも消費できるからどつちでもいいぞ」

「あー……じゃあ、ちよつとレイフオンでも連れて行きます」

「あいつ嫌いだろ？ 甘いもの」

「嫌いですけど」

「……まあ、あいつを連れてくるつて言うならオレは甘くないモンも作っておくかな。あ、場所は学校の調理実習室だから、よろしく」

——オレだけつていうのは、怖い

あまり慣れていないのに、この人といきなり2人きりつていう空間は……辛い。

そこまで思つて、ん？ と首を傾げた。

「学校の調理室？」

「そう。だつて家だと金かかるだろ？」

「……ああ……」

この人もこの人でレイフオンと似たような人だ、と思う。

正直オレとしてはレイフオンが先輩を嫌っているのは所謂同族嫌

悪だと思っている。

「よく借りられましたね」

「いやあ、担当に言ってもしようがねえなあと思って生徒会長に」

「……………ともかく、連れて行きますんで」

「うん、了解」

やや頬が引きつるオレに、ウォルター先輩がにこやかに手をふって去っていく。

オレは緊張という圧力からようやく開放され、ふうと息を吐く。どつと汗が出る。

「びっくりした…。いきなり声かけて来るんだもんな」

悪い人じゃないとわかりきっているからいいが、普段の態度を見ているとある種の不良に見られてもおかしくはない態度だ。

ただ、レイフォンから聞くほど完全に悪逆非道の人であるとは思わない。

実際接してみると、接し方が雑なだけで良い人ではあるのだ。

「さて、呼びに行こう」

ともかく、現在レイフォンはおそらく教室に居るだろうと見当をつけ、オレが教室に踏み入れるとビンゴ、居た。

ついでに、レイフォンとよく一緒に居る3人組女子も。

……………このモテめ

「レイフォン」

「あ、エド。どうしたの？」

声をかけるところちらを向いたレイフォンに、オレが先程のあった事と、来ないかという事を告げるとかつて無いほど嫌な顔をされた。

「……………嫌です……………」

「えげつない言い方だな」

ものすごく低く、その上若干の——と言っているのかはつきりしないのだが——殺意を込めた声でそう言われた。

なんか、これオレが傷つくわ。

この状態のレイフォンといつも居るウォルター先輩マジ先輩

「レイフォン用の甘くない菓子も作るって言ってたぞ」

「……………」

「あと、簡単な料理も作るって」

「……………」

レイフォンの顔が「レイフォン用」という言葉で段々崩れてきた。すると突然、いつもは引つ込み思案なメイシエン・トリンデンがぐつと前に出てきた。

「レイとん、行く」

「……メイ？」

「行かないと損だよ！」

「メイっち、お菓子と料理のこととなると眼の色変えるからねー」

隣に居たミイファイ・ロツテンがのんきにそう言った。

それを見ていたナルキ・ゲルニは諦めているようで、呆れた顔をしている。

「行くしか無いみたいだぞ、レイとん」

「あー……うん。そうだね。メイが行きたいみたいだし…、それに、残ると食べ物もつたいたいしね」

「レイフォン…、素直に行きたいって言うてもいいんだぞ？ 誰も茶化さねえよ」

「ち、違います！ 誰が進んであの人のところになんて！ 違いますからね、決まて行きたいわけじゃないです！」

——— なんだ、ただのツンデレか

つか、レイフォンでもこうなるって言うのは割と珍しいなあとおレは何気なく思うわけだけど、だからってモテが許せるわけじゃない。

（ここ重要。）

「じゃあーウォルター先輩のところにレッツラゴー！」

ミイファイが元気よくそう叫んだ。

「……………で？ 別に構わないんだがねえ」

「別に、来たかった訳じゃないです」

「はいはい」

レイフォンのむすつとした表情に苦笑を返し、ウォルター先輩がオレ、レイフォンと、ついてきた三人組にプラスして更に居る他のメンツに眼をやった。

「で、アントーク達はなんで？」

「迷惑だったか？」

「いや、消費者が出来て嬉しい限りなんだが…、何処で捕まえてきた、と」

そう呟いて先輩がオレを見た。

オレはどう答えようかやや戸惑いつつ、口を開く。

「えつと、廊下で合流しました」

「ああ……そう。端的な説明ありがとよ。…ま、いいけどな。適当に座れよ。ある程度できてるから」

そう言つて先輩が冷蔵庫に足を向け、言われたオレ達は適当に机に座った。

なんとなくオレ達一年組と先輩組で机につくと、先輩が左手にケーキやらクツキーやらを持ってきて、右手に料理類を乗せてきた。

「受け取ってー」

「分かった」

「分かりましたー」

二年生軍と一年生軍に受け取ってもらうと、先輩はまだあるらしい皿を冷蔵庫に取りに行つた。

机にどんどん並んでいく料理と菓子類に机に着席したオレたちは啞然とした。

「……これ、この短時間で……？」

「同時進行つて辛いよなー」

「笑顔ですか！」

レイフォンがツツこむが現在の先輩には効力が無いらしい。

ふわふわと花が飛んでいるかと思う程テンションのふわふわな先輩作成の菓子に手を付ける。

「……!! これ、は……!!」

「どうだ？」

「うまい！ うまいぞ……!!」

十七小隊隊長、ニーナ先輩がいままさにきゅぴーん！ というような反応をして眼を輝かせた。

先輩がいま食べたのは生クリームケーキだ。

ちなみにオレも食べたが、さっぱりとしたくちあたりで、しつこい甘さも無い。

甘党だと聞いていたのもつと甘ったるいケーキかと思っていたらそうでもなかった、どころかものすごくうまい。

フォークが止まらない。

「アルセイフ、お前はこっちにしておいたほうがいいんじゃないの？」

「…なにがですか？」

「ほら、これは砂糖使ってないから。あんまり」

「……………」

そう言つてショートケーキサイズのケーキをウォルター先輩が差し出して、オレの隣に座るレイフォンに渡した。

レイフォンはフォークでひとくちサイズに切り取って、恐る恐る口に入れた。

「……………」

レイフォンが眼を見開く。

その様子を少し心配そうにウォルター先輩が見やっていた。

「……………」

「そりや良かった」

ウォルター先輩が普段では見られないような笑顔を浮かべてレイフォンの頭をぽんぽんと撫でた。

「イオ先輩」

「どうした？ ロス」

「取れません……」

「切るのへ、」

「なんです……？」

「いやなんでも」

へた、と言おうとしたのだろうがウォルター先輩はフェリ先輩は睨まれて口をつぐむ、そしてフェリ先輩が切り取れなかったケーキを切り取ってあげていた。

ふとウォルター先輩が「あ」と呟いた。

「……どうしたんですか？」

意外にもレイフォンがもぐもぐとケーキを食べながらウォルター先輩に問いかけた。

「いや、アイス出し忘れた」

「まだあんのか」

さすがにどうなんだとシャーニツド先輩がツツコんだ。

それ、オレも言いたいです。

「美味しいね……さすがウォルター先輩」

向かいに座っていたロツテンが口を開いた。

そしてそのロツテンの隣に座るトリンデンも口を開く。

「……うう、ちよつと悔しいかも……。わたしのより美味しい……」

やはり同じ菓子を作る、料理を作る者として悔しいようだ。

しかしそれでも尊敬として悔しいらしく、笑みを浮かべていた。

最も、トリンデンが激しく悔しがるという姿は想像しがたいのだけ
れど。

出された料理も菓子類も皆で食べきり、残ったのは空っぽになった
皿だけだった。

「おー、みんなよく食べたなー」

「ごちそうさまでした」

「ごちそうさまでした」

丁寧全員がそういう。

やや微笑を湛えながら皿を片付けるウォルター先輩は、すでに普段
通りの先輩だった。

先に帰っていいぞ、と言われたレイフォン達は先に帰路についていた。

「美味しかったですねー」

「あいつああいうことは本当に得意だからな。…そういえば、合宿はこれで出来るかもしれないな」

「合宿ですか？」

「ああ、近々合宿をしようと考えているんだ」

「いいんじゃないね？ あいつの飯はなんだかんだ言っつてうまいし」

廃都市でもその腕前を振るっていた事をシャーニツドが言う、それにレイフォンはやや眉をよせてシャーニツドを見た。

「僕も作ってましたけどね」

「あー、そうだったな。いやいや、お前が作ってたこと忘れてた訳じゃねえぞ」

「忘れてたんですね。別にいいですけど。どうせ僕よりウォルターの方が料理の腕は上ですし」

「いやいや、ひがむなよ」

シャーニツドが苦笑を浮かべてレイフォンを見たが、レイフォンは「ひがんでません」とふてくされてそっぽを向いていた。

しかしレイフォンは、すぐに違うことに思考を巡らせた。

「…ウォルター」

「ん？ アルセイフ。どうした？」

翌日の昼、レイフォンはウォルターを捕まえてずいっと布包の四角い箱を差し出した。

「……え、なに？ 毒薬？」

ガンツ。

レイフォンがすつとぼけた言葉を言うウォルターの頭を手刀で強打した。

「いってえな、なにすんだ」

「あなたこそ人が作って来たものになんてこと言っつてくれるんです

か」

「いやいや、おまえからどんな心代わりだと思っただと

うっかり戦慄したぜ、とウォルターがわざとらしく汗を拭う動作をした。

レイフオンはそれに頬を引きつらせつつ、箱を押し付けた。

「で、なんだよ、これ」

「開ければ分かります」

「……………弁当？」

「……………そうですよ」

「なんでまた」

ウォルターが怪訝にレイフオンを見た。

レイフオンは決してウォルターと眼を合わせずにそっぽをむいていう。

「昨日、色々ごちそうになったので」

「……………律儀だなー」

「うるさいです、さっさと食べればいいです」

「それ軽い死刑宣告？」

再びレイフオンの手刀がウォルターの頭を直撃した。

ウォルターはからかうことを諦めて蓋を開けておかずを口に入れた。

「……………お、うまい」

「……………それは良かったです」

「うまいな、これ。どういう風に作ったんだ？」

「教えてあげません」

「辛辣ー」

「ついでに言うとそのれ昨日の残り物なんで」

「辛辣だわ、それも」

ウォルターはやや真顔でそう言うのと、弁当を食べることに集中した。

そこへエドがやってきた。

「お、ドロソ」

「先輩。昨日はごちそうさまでした」

「いや、気にすんな」

「あれ、その弁当……」

「ん？ 昨日の残り物お礼もらった」

ウォルターが食べていた弁当の説明に、エドが首を傾げた。

同時にぴしりとレイフォンが隣で固まったのでどうということかと思ひ、エドに再びウォルターが問いをかける。

「アルセイフからはそう聞いたんだが」

「……だってそれ、今日レイフォンが夜中に作ったけど自信作だって言ってる、」

「エド、それ以上何か言うのはやめようか」

「むぐむぐむぐ」

レイフォンが神速でエドに近寄ると輝かしい笑顔でエドの口を塞いだ。

ウォルターはぽかんとしてレイフォンを見ていた、その視線に気付いたらしいレイフォンはバツが悪いという顔をしてウォルターに向かって叫んだ。

「違いますよ！ 自信作はそっちじゃなくて僕の弁当の方……!!」

「いや、違うだろ？ だってその布の方だった……」

「変えたの!!」

「いや、見てない……」

「見えない所で！」

「移動教室とか基本今日ずっと一緒だったから見てなかった時は無かったとおも、」

「あつたの!!」

ウォルターはやはりぽかんとして、それから苦笑した。

「…はいはい、残りモンだな」

「そう、そうなんです、そうですよ!!」

「了解、了解。だからそんなドローンの首締めるな」

数日前のレイフォンの言葉を思い出して、ウォルターは苦笑しか出来なかった。

——相変わらず素直じゃねえでやんの

くつくつと笑みをこぼして、ウォルターは弁当に手を付ける。

ようやく落ち着いたらしいレイフオンも弁当を食べはじめ、開放されたエドも食べ始めた。

もぐ、と口を動かして、何気なく呟く。

「んー、うまい」

ただの平凡な学生生活。

(そんな何気ないことだけど、喧騒の日々では何気ないことを一番大切にしたい)

全力でばかな十七小隊の話

「ウォールター」

「……………」

ピンポーン、と軽快に電子音が鳴り響き、玄関先にいた人物ら数名を見てウォルターは愕然とした。

本日は小隊の訓練も面倒な生徒会に駆り出されることもない……そう、唯一誰にも邪魔されずゆつくり出来るホリデイ、にもかかわらず目の前に現れた何処かそわそわした後輩2人、超嬉しそうな同級生、統率力というか責任感がまったくなく役に立たない先輩に全力で殺意を覚える。

しかも、超嬉しそうな同級生……金髪の女子の手には、何故か両手で必死に抱える程巨大な魚があった。

それは真鯛だ。恐ろしくでかい。そしてまだ生きている。先程からびちびちと尾びれが表面に付着している水滴を飛ばしてくる。

フェリは鬱陶しそうな顔でその水が当たらないようにレイフオンを盾にしている。

正直養殖湖でそんなデカイもん育てたら共喰いどころのもんじゃねーぞ、とか言いたくなるくらいでかい。さらに言えば、ニーナの腕がプルプルするくらい重たいらしい。

よくそんなでかく育ったなと言いたくなる前に、とつとと養殖湖にリリースしてこいと叫びたくなる。生きてんだから。

「わたしが捕ったんだ！ 捌いてくれ！」

「…………お帰りくださーい」

勢い良く扉を閉めて、ウォルターは即座に鍵をかけた。

1人を除き全員が武芸者であるという事実上、どう考えても無駄な行為なのだがウォルターにはこうせずにいられなかった。

「開けてくださいよ、ウォルターー！」

「……………」

「む、無視決め込んだじゃいましたよ隊長」

「案ずるなレイフォン…わたしにはまだ他の手がある！」
ピンポーン。

再び電子音が軽快に鳴り響く。
ピピピピピピピピピポーン。

連続して電子音を鳴り響かせるニーナにしびれを切らしたウォルターが、重低音で扉越しに脅した。

「…うるッせえよ…次やったら真鯛と一緒にてめえも捌くからな」

「…捌かれるのはご免だ」

「じゃあ、帰れ」

「どうします？　ここまで来て引き下がれませんよ」

「…とつとと帰れ料理下手」

ウォルターが吐き捨てるように言う。

それにニーナが衝撃を受けた顔をして口を結んだ。

「……………」

……ニーナは激怒した

必ず、このなんでもそつなくこなす無駄なHSKハイスベックに真鯛を捌いても
らわねばならぬと思った

ドンドンッ、とニーナが力強く扉を叩く。それに続いて何故か
シャーニツドがパンッ、と手を叩く。びちびちと真鯛が暴れる。

ニーナには料理がわからぬ。かつてより幾度と無く挑んだ料理で
は、悉く敗北していた

ある時は力任せにりんごを握りつぶし、ある時は衝剄を放って台所
を破壊したりもした

ドンドンパッ、ドンドンパッ、ドンドンパント。

「……………」

ウォルターはその音に眉根を寄せて呆れたような、憤りを覚えたよ
うな気がして、とてつもなく複雑な思いに駆られた。

けれど女として、乙女として、ニーナはそういった事柄を追求する
事は決して絶やさなかった

ドンドンパッ、ドンドンパント、ドンドンパント！

「…………うるッせえよ！　人ン家前で何軽快なリズム刻んでやがるんだ

てめえら！」

「さあ一緒にどうぞ」

「やらねえよ、ばかアルセイフ！ その音続けられてもオレは歌わないからな」

「ウォルター歌上手いって聞いたのに残念だな。じゃあこのおれ様が、」

「エリプトン……ッ、先……輩……ッ、……が！ やっても同じだったの！ やめろ！」

耐えかねたウォルターが扉を開くと、やはり嬉しそうなニーナの顔が視界に入った。

鬱陶しいなあ、と思いながら何とか追い返そうと思いを巡らせる。

「we will……」

「歌うな。……お前ら、本当オレにどうしろってのよそれを」
「捌け」

「そんなでかいの乗せるまな板なんてねえよ！」

「ツツコむところはそこですかと言いたいですが、ウォルター、ここに
ありますよ」

「あんのかよ。……そんなでかいの捌く包丁もオレは持ってな、」

「イオ先輩……、こちらに」

レイフオンがまな板と言うより本当にただの板を掲げ、それに続いてフェリが掲げた普通の出刃包丁より明らかに大きい包丁をウォルターは見た。

そこまで用意してはどうして自分たちでやらない。

ウォルターはこめかみを押さえながら、レイフオンに声をかけた。

「お前出来るだろ、魚……捌くくらい」

「え……？ ……だって僕……、か弱いですから……」

「老生体1期以上に平然と1人で立ち向かうヤツは、か弱いとは言いません」

『ピンポーン』

「インターホン鳴らすなっつたろアントーク」

近所迷惑だろうと素直にウォルターは言う。

……言ってから思ったが、都市の外れにあるこのアパートでは、どれだけインターホンを鳴らそうと迷惑にはならないのだった。活きの良いびちびち真鯛を抱えている十七小隊の隊長がしようと何も怪しがられないのだと。

まあでも耳障りなのは確かであつたし、鳴らないなら鳴らないでそれはいいそれでいいのだが。

「つかお前ら、そこまで揃つてんなら公開生解体ショーしてこいよ、そこいらで。オレを巻き込むな」

「僕らだつて巻き込まれたわけですけどね」

「と、いうことですのでイオ先輩」

そ…っ、とフェリがウォルターの手に出刃包丁を握らせてきた。

そしてそのフェリの後ろで口を開くシャーニツド。

「★ほうちよう★ テレレーテレレ♪」

「……だめ！ 無理！」

「ブフォツ、ちよ、ウォルター……ッ」

遠い目であえてノリに乗つて見たらやはりシャーニツドは予想通り吹き出して笑い出す。

そんなシャーニツドとウォルターを横目で見ながら、レイフォンがしらつとした顔で眉をよせてウォルターを見ていた。

「…ウボア…ウォルターにあの可愛さは出せませんね」

「出せても困るっての」

ため息混じりにそう言い放ち、ウォルターは握った包丁へ視線をおろした。

「……」★ほうちよう★を装備したいまのオレは、お前らを刺しても夢ですむんだよな。エリア移動したら復活してんだよな。『キョアーオ』つつつて死ねよ」

「死ねつて言った！ 死ねつて言った！」

「えい」

「キョアーオ！」

刺す真似をしたウォルターに、レイフォンがまな板を構えて防御態勢をとった。それに対し、シャーニツドは声を上げて数歩下がると、

小さく笑い声をだしながら叫んだ。

「ふっふっふ…おれ様は不滅…：…なにがあらうと生き残る男だ…！」

「…：…シャーニツドは滅びん！ 何度でも蘇るさ！」

「…：…：…：…：…バルス」

「眼ツ、」

シャーニツドがお決まりで騒ぎ出す前にウォルターはレイフォンからまな板を奪い、ニーナからびちびち真鯛をひったくって扉を閉めた。

「ウォルター！ 開けろおおおお」

「とつとと滅んでろ」

ため息混じりに話を打ち切り、ウォルターはさっさとまな板の上においてあるもののびちびち跳ねる真鯛をテーブルにおく。

いまだ活きが良い真鯛は、悟りを開いたような眼でエプロンをつけたウォルターに頭をまな板に押さえつけられて、尾びれを近くに突いたナイフでまな板に縫い止められて、息の根を止められた。

アイボリー色のエプロンには派手に散った血が付着する。

さてここからどうしようと思った矢先、扉の向こう側からなにやらくぐもった声が聞こえ始めた。

「…：…イオ先輩…：…お腹すきました」

「平常運行だねお前は」

「開けてください。お腹すいたので食べたいです。開けてください。…：…開けなさい」

「…：…はあ」

しようがないなあとウォルターは扉から一歩おいて開けた。

エプロンについた派手な血に一瞬ニーナがびくりと肩を跳ねさせたが、部屋に足を踏み入れる。

その瞬間、ニーナは足元で起動したトラップに引っかかり宙吊りになった。

「な、んだと…：…ツ?!」

「…：…どうしてオレが一歩おいて立っていたか…：…つは、ばかだなあア
ントークは」

過ぎ去った、記憶

「ふぁー……」

ウォルターは窓のカーテンをあけて、いつもより遅い時間帯である朝の日差しを浴びた。

あくびをしながら身体を伸ばし、一息吐く。

(おはよう)

「ああ、おはよう。まさかこんな時間まで寝てるとは。休みだからって気をぬきすぎたかな」

(別にいいんじゃないかな？ たまにはしつかり寝ることも必要だよ。ところで、今日の予定は覚えてる？)

「予定？ ………………何かあったか？」

昨日は忙しくて寝た時間がものすごく遅かったのだ。

だからまさか明朝に寝る事になるとは思っていなかった。

まあ、そのせいで起床が遅れたわけなのだが。

「……なにがあった？」

(レイフォン・アルセイフとシャーニッド・エリプトンと何処か行くって約束してたでしょ？)

「……………ああ、そういえば。……まだ時間あるなあ。来るって言ってたし……、もう一度寝ようかな」

(寝るの？ 構わないけど……)

「寝る。眠たいから」

(そう。じゃあ、僕も少し休もうかな)

端的な返事が聞こえて、ルウの声が消える。

ルウが日常的に騒がしいというわけではないが、やはりルウが言葉を発する……と言うより、ウォルターに話しかけてこない状況では、思考は静かになる。

なによりもいま自分に考え事をするほど頭が回っていないということもあるけれど、常日頃から2人でひとつの思考を共有している

と、こういう時に妙な静けさを感じている、というわけだ。
ウォルターはゆっくりと息を吐いて、ベッドに横になる。

「あー……。体重い……」

まだ疲労が残っているのだろうか。

異様な身体の重さにウォルターはひとつ溜息を吐いてベッドに体重を預け、意識が落ちる流れに逆らわず、再び眠りについた。

「あんた、ねえ。あんた」

「……………?」

思考を遮る音の高い声に呼び止められ、ウォルターは振り返る。

視線の先に居るのは、まだ幼い少女なのだが、その瞳には明らかに敵対心と自らに対する自信に満ちていた。

少女の名前は、アルシエイラ・アルモニス。

つい最近、ここ槍殻都市グレンダンの女王に即位したのだ。

彼女の到力はかつての王たちを凌ぐ程で、このグレンダンが望んでいた子が生まれたと上層部は喜んだものだった。

しかし、このグレンダンで天剣として居続けているウォルターから言わせれば、こんなにも若い少女にいきなり即位させるといふのは、ちからが強いからと言って増長させることになりそうで一抹の不安を抱いているのだが。

だが、少女は無表情で視線を送るウォルターが気に入らないらしく、頬をふくらませている。

「ねえ、あんた、ウォルター・ルレイスフォーンでしょ?」

「…そうだけど…、なんか用事でもあんの?」

少女とはいえ、一応は女王である存在に対してでも、特に臆することのない話し方でウォルターは肩を竦めた。

初代グレンダン王の時代から貴族、王族とは関わってきたが、ウォルターが真面目に取り合う事は無かった為、どの王にも諦められたのだ。

だが、この少女は幼さゆえにそれが許せないらしい。

絶対として崇めてでも欲しいのか……、そう思つてウォルターは呆れ顔で頭を振つた。

「で？ なんですかね〜女王さま？」

「…あんだ、その態度むかつく…」

「悪いけど、これがオレだから」

淡白に言い放つと、アルシエイラは更に不服そうな顔で腕を組んだ。

「あんだ…、わたしが女王だつて分かつてるの？」

「もちろん。だが、あんだが敬意を表するに値する存在かどうかは別だろ？ なにを言つてンのかね、このガキは」

「……じゃあ、実力勝負」

「はあ…？」

アルシエイラが拳を構え、ウォルターにそう言う。

が、ウォルターは酷く鬱陶しそうな顔でアルシエイラを見、飛びかかるうとするアルシエイラの頭を人差し指で突いて動きを制止させた。

「面倒くさい、かかってくるな。ガキか……つて、まだまだガキか」
「つ……！」

嘲笑混じりに息を吐くと、アルシエイラは更に幼いながらに流麗な表情に苦渋をにじませた。

『グレンダン最強』を誇るアルシエイラにとって、『ウォルター如き』に人差し指ひとつで制止させられてしまう事が酷く悔しい様だ。

しかし、アルシエイラをはるかに凌駕する年月を生きているウォルターとしては、それこそ老化していると否めなくなる時期が来ない限り負けることは無いし、この世界に続く運命が終結するまで、負ける訳にはいかない。

「それで？ やりたいことはこれだけか、クソガキ」

「……………はあ」

「…溜息吐きたいのはごつちだつての。ンとに、最近のガキは活きが良いなあ。良すぎるくらいに」

ウォルターは勢いの止まったアルシエイラの頭から人差し指を離して、その手を顎へ持つていった。

感慨深そうに呟くウォルターの、*「隙ができた」*脇腹めがけてまだ諦めていなかったらしいアルシエイラが拳を放つ。だがその拳はウォルターが半身を逸らした事により命中せず、そのままアルシエイラの手首はウォルターに掴まれ、引つ張られる。

「っ?!」

「ほい、っと」

引つ張られたことで重心を奪われ、顔面から廊下へ向かいそうになるも、開いた片手でウォルターがアルシエイラの襟を掴んだ為転倒は免れる。

しかし、やはり策が通じないウォルターにアルシエイラは眉を寄せ
る。

「ガキはおとなしくしてろ。……そんなに死にたいか?」

殺すつもりは無い。

だが、重低音の声音は少女に厳しく現実を突きつける。

これからまだまだ成長の余地はあるというのにその才能を潰すつもりはないし、先の戦いで目標達成の為に戦う気はあるがこの世界の事を短命な *「子ども」* に言われることもばかばかしい。

結論から言えば、役に立ちそうなのだからその芽を摘む気は無い、
が、いちいち突つかかられてもただ疲弊するから鬱陶しいということだ。

そういう予防線も兼ねて一旦折るわけだが、少女は諦めきれないという瞳でウォルターの萌黄色の瞳を見つめていた。

そんな少女の瞳に対して、ウォルターは本日何度目かもわからない溜息を吐き、少女を睨め付ける。

「お前がもうちよつと腕を上げたら、また相手してやるよ。それまではおとなしくしてろ」

鬱陶しい。小さくそう付け加えて手を離すと、アルシエイラはむすつとしたまま踵を返し、足早に去っていく。

ふう、と再び溜息を吐いてウォルターは頭を搔く。

——何だってんだ？

まあ幼心からくる行動だったのだろうが、ちゃんとした意図の読めない行動にウォルターは眉を寄せて頭を振り、思考を放棄する。

とりあえず、自分はある少女が来る前まで、なにを考えていたのだろうか。

本題を忘れてしまったウォルターは息を吐いて新たな思考を巡らせる。

——確か、どっかに行こうと思ってたような気がする

うん、そんな気がする。

だが何処へ行こうとしていたのだったか。

そこが一番大切なのだが、そこが一切思い出せない。

少し考えていたウォルターはやはり溜息を吐いて、忘れる程度のことなのだと思い思考を放棄した。

放棄したことによりすることはなくなった。

それなら、なにをするか……そう考えて視線を動かした先で、剽の弓矢が見えた。

エア・フィルターに届くかというほど高く、力強く放たれた弓矢。

あれほどの威力を撃てる人物は、ウォルターを除いてグレンダンでもひとりしか居ない。

天剣授受者のティグリス・ノイエラン・ロンスマイアだ。

弓使いの天剣授受者で、念威操者であり天剣授受者でもあるデルボネ・キュアンティス・ミューラとは仲がいいとかいう話を聞くが、ウォルターとティグリスは別にそこまで仲がいいわけではない。

寧ろ、ティグリスがウォルターを見つけると口を開けば説教ばかりと言ってもおかしくはない為、どちらかと言えばウォルターにやや苦手意識があるというくらいだ。

——まあ、別にロンスマイアは変なヤツではない……んだよな
戦いに全力投球という点では変なヤツではあるが、それはまあ、ウォルターは人のことを言えない。

ウォルターこそ、そういう戦いに全力を尽くさなければ気の済まないタイプだ。

テイギリス本人は、戦いに対してそこまで貪欲な人間ではないが、技術の向上に関してはそれなりにうるさい。

他を顧みないウォルターをよく咎める役目もテイギリスに回っているのだが、それは他の天剣授受者がウォルターに口を出せないからであって。

しかしウォルター自身、かつてから天剣に座しているが故にそういう状況が出来上がっているなか、それを意にも介さずまっすぐなことをいうことの出来るテイギリスのそういうところに関しては買っているつもりだ。

また、デルボネについても同様のことが言える。

彼女もテイギリスと同じ系統の人間のように、ウォルターという天剣の中でも頂点に立つであろう存在、そして念威に関して高い知識を持つているという事に臆さず事をはっきりと伝えてくる。

自分をしかと見据えている証拠なのだろう、となかなかの良い逸材だとウォルターは見ていた。

——けどやっぱ、説教は勘弁してほしい

別に自分の実力に自信がない訳ではないが過信しているわけでもない為、そういう指摘を受けることは逆に嬉しいと思う。

今後に活かせる的確な指摘をテイギリスはしてくる。だからいいのだが、話が長いのが難点であって。

嬉しいのだが複雑な気分だ。

「……ま、いいか」

空に咲く矢の花を見上げつつ、ウォルターは口角をあげた。

「ねえウォルター……暇」

「……仕事しろよ、アルモニス」

大きな溜息を吐きながら、ウォルターは目の前の椅子で不機嫌そうな顔をしてこちらを見る女性へ眼を向けた。

女性と言っても、見た目は10代後半入りたてか……そのくらいで

あろうととれてしまうような容姿。だが、実際はもう少し年上だ。

立派な年齢詐欺をしているウォルターが言えたことではないが、年齢詐欺だと言いたくなる。

「ねえねえねえねえ〜」

「うるっさい」

「酷いー、ねえ相手してよ」

「嫌だ。そんなんだから警護当番のノルネがストライキしちゃうんだよ。怒ってたぞ、ノルネ」

「え、バーメリン？　バーメリンはどうでもいいのよ、相手しなさいよ」

不服そうに頬を膨らませ、ここ、槍殻都市の女王……アルシエイラは机の書類を叩く。

その度にかたがたとインクの瓶が揺れ、ウォルターはインクを零すなよと忠告を零す。

そう、天剣授受者であり本日の警護当番であるバーメリン・スワツティス・ノルネは、この女王のやる気の無さとあまりの退屈に誰彼なく絡む面倒臭さに耐えかねて、ウォルターに交代を申し出たのだ。

バーメリンは基本なんだかんだと言って律儀のため、ある程度女王が何かを口走っていたとしても放置なのだが、あまりに絡まれて腹に据えかねたようだった。

偶然通りかかったウォルターをひっ捕まえて、随分立腹した様子で交代を頼んできたのだ。

友好関係的には普通のウォルターだが、あまり頼まれごとはしないため驚いた。が、原因がこの女王では仕方ないと半分ウォルターもあきらめている。

「そう言うな。お前、自分が退屈だからって人を巻き込むな。他のヤツは忙しいんだよ」

「わたしだって忙しいわよ。こんなに書類に追われて」

ウォルターの睨め付けるような視線に対してアルシエイラは自身の机の端、床に積まれた書類の山々を叩く。

しかし、そんなアルシエイラに冷たく言い放つのがウォルターで

あつて。

「お前な。それだけの量をきっちり整理整頓、処理してつてなかったのはお前の責任だろ。きっちり責任持つてやれ」

「むー。納得できないあい」

「出来ない、じゃない。しろ」

「……冷たいーウォルターがいじめるうー」

「いじめてねえよ……」

うそなきを始めたアルシエイラに、ウォルターは呆れ混じりに溜息を吐いて自分の処理が終わった書類をアルシエイラの机にたたきつけるように置いた。

「おらよ、追加」

「やー！ もういやー！」

「ガキか、とつととやれ。いい大人がぐずるな、うつとうしい」

「おかしい、絶対おかしい。ウォルターなんでこんなに高速で仕事終わるの？」

「オレだからだよ」

「理解できない！」

鼻で笑いながらウォルターが言い、ソファに戻るとアルシエイラが手に持っていたペンをウォルターに向かって投げる、がウォルターはそれを避けて平然と書類を読み進める。

「なんで避けるのよー」

「あのなあ……あの程度避けられなかったら情けなさすぎるだろうが。やるならいつそ到でも込めて投げろよ」

「そんな事したらペンがボシュツ、って消えちゃうじゃない」

「だからいいんだよ」

やはりアルシエイラは納得がいかないという様子で頬をふくらませてそっぽを向く。

一向に仕事が進まないアルシエイラに、ウォルターは呆れた溜息混じりに口を開いた。

「じゃあせめてその机に乗ってる分を片付けろ。そうしたら一旦休憩入れてやる」

「ほんと?!」

「ほんとほんと。ほら、さっさとしろ。早く終わらせれたら、飲みモンと一緒になんか甘いモン出してやるよ」

「俄然やる気出てきた」

きらきらと眼の輝き始めたアルシエイラに、安上がりだなあと思いつつウォルターは手を動かす。

ただし、問題はどうかやって作るか。

この女王、眼を離すとすぐ何処かへ行こうとする癖があるので、逃走防止策を出す必要がある。

しかし特にいい案は出ない。

アルシエイラの面倒くさい所は、他の天剣のいうことを聞かない所だ。

ティグリスの言うことはギリギリきくののだが、それはティグリスが怒ると後々ものすごく面倒くさいという理由からであって、また、現在はティグリス王宮に不在。

わざわざ来てもらう程のことではないだろうし、念威端子を配置した所で無駄だろう。

(この上無く面倒くさいな)

(ウォルターの提案だしね、アルシエイラ・アルモニスも絶対出てくるって思ってるでしょ)

(まあ…)

ウォルターは基本自分から言い出したこと、または約束したことはきっちり守るタイプだ。

相当疲れていたりどうしても外せない用事が出来る等の問題が発生しない限り、その辺りは守って信頼を得ているつもりだ。

(だけど、今回の行動を渋る理由はアルモニスにあるわけであって…)

(そうだねえ…。わざわざ異界法則を使うのも馬鹿らしいし…どうしようね?)

(アルモニスを厨房へ連行、とか)

(それウォルターだから言うことだね)

ルウがけらけらと笑いながら言う。

そうかなあ、とウォルターが書類をひらひらとめくりつつ頭を掻いた。

「アルモニス」

「はあい。まだ終わってないわよ」

「：お前、ちゃんとここで“待て”出来るか？」

「え、出来るわよ」

「え」

珍しくはつきりと返ってきた返事にウォルターがきよとんとした。

アルシエイラも眼を丸くしたようで、お互いにきよとんとしてしまい、ウォルターが気まずいと頭を掻く。

「…ならいいけどな…」

「なによ、またどつか行くとか思ったんでしょ。残念だけど、あんたの武芸者としての腕前と料理と菓子作る事についての腕前は認めてるのよ、一応」

「……それは……喜んでいいのか……だめなのか……よく分かんねえけど」

「素直に喜ばばいいじゃない。ほんっと、ひねくれてるわね」

「別にそこまでじゃねえと思うけどなあ」

ウォルターが苦笑交じりに再び頭を掻いた。

そんなウォルターにアルシエイラは呆れ顔で溜息を吐く。

「あんたねえ、わたしが天剣であるあんたとどれだけ居ると思ってるの？」

「お前がそんな歳になるまでだな」

「それは余計」

アルシエイラが笑顔で持っていたペンをぶん投げてきた。

それを掴んで机に置きながら、ウォルターがはいはいと返事を返す。

余裕綽々なウォルターに、アルシエイラはあからさまに舌打ちをして見せて溜息を吐いた。

「だから、あんたがどういうヤツか、それなりに把握してるつもりよ。ま、武芸のことに関してはやっぱり悔しい面とかあるけど、あんた

だったらしようがないし。それに、あんだだったら納得できる」

「……まあ、オレとしては納得してもらってもしてもらわなくてもどっちでもいいんだけどな」

「適当……。でもま、なによりあんたのその料理の腕前に関しては自負していると思うわ」

王宮の料理人に負けないくらい美味しいし。

そう言っただけでアルシエイラは女王にはふさわしくないであろうが、ひとりの女性としてはふさわしい、快活な笑みを浮かべた。

——昔はあんなだったのに、飲み込みと理解が早くなったモンだ

前に、アルシエイラが本来の目的をはっきりと王家から聞いたことと同時にウォルターも秘密裏に彼女に伝えたのだ。

自らがどういう存在であるか、何のためにここに居るのか。

それを伝えた際、彼女は酷く驚いていたがそれ以上に納得した顔をしていた。

あんたが強い理由がわかった

そう言っただけ。

だが、ウォルターは目的等を話したのみであり、最も重要な内容を話しはしなかった。

彼女には、わかったというのだろうか。

言わずして、察したとでも言うのだろうか。

ウォルターは軽く頭を振って、もう少しで終わりそうなアルシエイラに厨房へ行くと言え、移動する。

手を動かしながら、ウォルターは思考する。

何よりも、あの女王がそういう事に疎い人間だということは分かっている。

何故か、と言われれば簡単だ。

彼女は強い。だからこそ、弱者の気持ちを知ることが出来ない。

人間は自分がそういう立場に置かれたり、自分がそういう人間だということではなければ知り得る事は無いだろうし、彼女はもとより強い存在であれとして生まれた者だ。

そんな彼女に、弱さを知れといったところで無理なのだろう。

では、ウォルターは？ そう聞かれれば、正直微妙だ。

素体が違うとは言え、一応は“人間”という事になっていて、人間の様な素振りをする事も出来る。だが、ウォルターはゼロ領域へ入った。

ゼロ領域はウォルターのすべてを暴き立て、自身の矮小さを思い知らせるに十分な空間だった。

ある意味思い知っているとえばそうだが、ゼロ領域の使い方さえ知ってしまえばそう脅威ではないその脅威に、ウォルターはいまそこまでの畏怖を抱かない。

だからといってうぬぼれているわけではないのだが……

「なにをしているんですか？」

「…あれ、リヴィン」

思考を遮った声の主は、カナリス・エアリフォス・リヴィンだ。

アルシエイラの影武者であり、天剣授受者でもあり、女王不在の場合は女王に扮して執政を行っている。

訝しげな目つきでウォルターの手元を見る彼女だが、ウォルターには何故彼女がここに居るのがわからない。

「リヴィン、どうしてここに居んだ、お前」

「居たら悪いですか？」

「いや、居るなんて珍しいなと思う程度だ」

カナリスのやや不機嫌そうになった声音に淡々と返事をしつつ、ウォルターは遅滞なく手を動かす。

その手つきを見ながら、カナリスはウォルターに声をかけてきた。

「陛下の提案ですか？」

「いや、今回はオレ。随分アルモニスも飽きてきてたみたいだからな。これでやる気が出るなら安いモンだよ」

「……相変わらず甘いですね」

「甘党なだけになってか。…まあでも、厳しくするだけが大事ってわけでもねえし。確かにためてたアルモニスが悪いが、だからってかちかちに詰めても終わりやしねえだろ。こういうモンにつられてでも

やってくれた方が助かる」

ウォルターの言葉に、一瞬むっとしたカナリスだったが、それでもふっと表情をほんの少しだけ綻ばせた。

「あなたは人の扱いがうまいですね」

「そうかあ？ オレはそんなつもりないんだがね」

「いいえ、陛下のような方でもうまく対応出来るその対応力には、感服します」

「オレはそこまであいつに忠義出来るお前の方が凄いと思うけどなあ」

「わたしはそうなるべくしていますから」

「……そ。じゃあ……」

ウォルターは出来上がったものを手際よく切り分けて、皿に一切れ置いて、フォークと一緒にカナリスに差し出す。

差し出されたカナリスはよくわからないという顔をしたまま皿を受け取ったが、ウォルターと皿を交互に見やっついていて、そんなカナリスが面白くてウォルターはくつくつと笑いを零す。

「ご褒美だよ。頑張ってるリヴェインにな。それじゃオレ、アルモニスの方行くから」

「あ、はい……」

厨房に來た理由は特になかった。

ただ、甘いにおいがしたためまた陛下に頼まれて誰かが作っているのだろうと思えば、彼が居たというだけの話。

だがまさか、おすそ分けをもらうとは思わなかったが。

どうやらベリーケーキのようで、ケーキ全体グラサージュされており、光できらきらと赤い光を放っている。

フォークでひとくちきり、口に入れてみた。

ふわりと広がる甘酸っぱいベリーの風味とケーキ全体のほどよい甘さ。

思わず唸った。

「ふん、ふん」

(ごきげんだね、ウォルター)

(おうよ、今日はうまくいったからなく、素直に嬉しい…)

感慨に耽った様子でウォルターが思考する。

ルウは小さく笑い声をこぼしながら呟く。

(良かったね。今日はあのグラサージユ、頑張ってたもんね)

(本当だよー、流した後に綺麗に固まるかどうか、そこが勝負どころだったんだ)

(あはは、勝負どころだったんだ。でも、本当に綺麗な見た目に出来たよね、凄いやウォルター)

(そこまででもねえよ。ルウだって覚えりやすぐだ)

(僕はやらないよー。ウォルターのが食べたいんだもん)

そか、とウォルターは上機嫌に頷き、待っているであろうアルシエイラの元へ急いだ。

甲高い電子音が響いた。

懐かしい夢を見ていたような気がしない事も無いが、その甲高い電子音に鼓膜を叩かれウォルターは眼を覚まさざるを得なかった。

のそのそと起き上がり、ウォルターは頭を搔く。

なにが起きているのか一瞬把握出来ず、頭を搔きながらウォルターは当たりを見渡す。

『ウォルター、まだ寝ているんですか?』

『おーいウォルター、起きろー』

活剽を使つて声を聞くと、どうやら聞こえるふたつの声の主はレイフォンとシャーニツドのようだった。

そういえば、今日の予定はレイフォン、シャーニツドと何処かへ行くことだった気がする。

その為に2人が来てくれるはずだからと、もう一度寝たような覚えがあるような。

そんなことを考えながらウォルターはのろのろと動き服を着替えて、玄関まで移動すると気の緩みきつた声を出しながら扉を開けた。

「へいへーい」

「ちよつと、遅いですよウォルター。ちゃんと起きてましたか？」

「起きてた、起きてたって。ただ眠たくてな……」

ウォルターがあくびをしながら眼をこすると、シャーニツドが物珍しいような顔でウォルターを凝視していた。

「お前も寝不足とかするの……」

「するよ、普通に……。で？ 今日は何処へ行くんだったか」

「フェリちゃんの仕事場だ！」

「……つまり、邪魔をしに行く」と

「嫌だな、応援だよ」

「……どうだか……」

軽く溜息を吐きながらウォルターはシャーニツドに言う。

レイフォンは眉を寄せてウォルターを見ていた、それにウォルターが訝しげな顔で問うた。

「どうした？ アルセイフ」

「い、いえ……ウォルターのそういうまともな……というか、ラフな格好初めて見たので」

「……そうだったっけか」

基本外出時シャツ系の服を着ている事が多いが、今日は本当にただの私服。

それがレイフォンには意外だったらしい。

「そんなに吃驚することか、これ……」

「でもおれもはじめてみたからちよつと驚いたな」

「……そうか？」

ウォルターは首を傾げながら自身の姿をぐるりと見、しかしよくわからないと肩を竦めた。

「さてと、じゃあ面倒だが行くとしますかね」

「そうしようそうしよう」

「はい」

頷いたが、そういえば、と思い出したような様子でウォルターが顎に手を添えつつシャーニツドに声をかけた。

「まあ、そこは当然エリプトン…先輩の奢り…すよね」

「おれは男には奢らねえぞ」

至って真顔で言うシャーニツドにウォルターは何処か遠い眼で頷き、レイフォンの肩を掴んで踵を返し始めた。

「じゃあ行かないでおこう。アルセイフ、映画でも行こうぜ」

「えっ、えっ、えっ」

困惑した様子でレイフォンはシャーニツドとウォルターを交互に見やるが、ウォルターはぐいぐいとレイフォンを引っ張る。

慌てて折れたシャーニツドに引き止められ、ウォルターはにやりと笑みを浮かべてシャーニツドを見た。

「交渉成立だな」

「このあくどさよ」

「…まあ…ウォルターですし…」

「オレだからってなんだよ。普通だろ？ オレは行ってやるんだから、このくらい当然」

シャーニツドがやくたびれた様子で財布を確認する中、ウォルターは揚々と先を歩き出した。

いつも通り、変わらない日々

ふわあ、と夜空が闇を落とす王宮の屋根の上でウォルターは大きなあくびをこぼしていた。

いま、王宮のエントランスホールでは盛大な宴会がひらかれている。理由としては至極簡単で、授受式だ。

アルニモス戴冠家出身、アルシエイラ・アルモニスによって主催される天剣授受者決定戦、そしてその授受式とくれば、女王に次ぐ権力者をつくりだしたということだ。

レイフォン・アルセイフ。いや、いまはもうレイフォン・ヴォルフシュテイン・アルセイフだ。

サイハーデンという少数派の刀を扱う武門出身でありながら、刀を使わず剣を扱って天剣となった。ウォルターが座していた天剣、ヴォルフシュテインの後釜だ。

天剣授受者決定戦は、死ぬか生きるかという戦いではない。だからこそ、天剣の授受式では後任の天剣授受者に対し、前任の天剣授受者が女王の目の前で渡す。

だが宴会の前アルシエイラに渡せと言われたものの、面倒くさがってウォルターはそれを拒否した。

それでも誰が渡したのかは不明だが、天剣は授受された。必要なのは授受されることであって、ウォルターが渡すことではない。

「ふあ〜……あ……眠……」

(ウォルター、もう帰ろうよお)

「せめていろって言われたんだから……いないとだめだろ……ふあ……」

(ええええ〜…相変わらず律儀だなあ。いいじゃない、あんなヤツのことなんてえ)

ぐずるルウをなだめながら、ウォルターは再びあくびをする。

まったく、よくこんな面倒くさい事ができるものだと思いつながらウォルターは屋根に寝そべり、頭の後ろで手を組んだ。

ウォルターも天剣になった時にしたものだが、あの時はいまからす

れば随分と昔だった。だからそんなに仰々しくは感じなかったが、その代わりかなり行われた時間が長かったという覚えがある。

グレンダンが設立されアルシエイラが王位を戴冠するまで、ずっと天剣は5人程しかいなかった。時に6、7と人数が増えたことはあったが、すぐにいなくなつた。ある者は退位し、ある者は死んでいく。そういう世界だ。

長くいたのは、ルツケンスから輩出されたあの天剣授受者程度だろう。念威操者の方は天剣ではなくただの知り合いで、仕事上付き合いがある程度だった。

だが、いまはどうだろう。天剣授受者は12人に膨れ上がり、ウォルターが抜けたことで開いた穴は新たな子どもが埋めた。

ウォルターは、ここに必要ない。あれだけのちからを有した子どもが現れたということは、おそらくそうなのだろう。

だが、不可思議だった。

あの子どもは、十年程前からそれなりに気にかけていた子どもの片割れ。

メイファー・シユタツト事件。

あの事件の際に見つけられ、デルク・サイハーデンによって保護された。

しかしウォルターが気にかけている理由は、その事件に関わつていなかったのではない。もっと深い部分だ。

——まさか、あの子どもが

エルミア。未だにその名を覚えている。

彼女はあの都市、天蜘蛛都市アトラクタで狼面衆に追われ、夫であるタウランに追いやられた。そして最後には、都市から出て別の都市へ。

……だが、おかしいと気づいている。

あの時にはすでに出産されていた彼女の子どもだ。それにもかかわらず、ウォルターがメイファー・シユタツト事件でその存在を再び確認した時、彼はあの時と変わらない姿だった。

あの都市からエルミアが出たのは、ウォルターがディックと共に学

園都市ツエルニに滞在していた時のことだ。もう数十年前の話。それにも関わらず、なぜなのか。

「はああ」

（どうしたの？）

「んー…疲れちゃった」

（帰ろうよ）

「……そうしようか」

そろそろ、夜が明ける。

ウォルターはなぜか、侍女の格好をした女性と共に古びたアパートにある、ある一室の扉の前に立っていた。

女性は長い黒髪を頭の上で一つにまとめ、楽しそうに掃除機を持っている。口紅が引かれた唇を楽しそうに引き伸ばし、彼女は意気揚々と扉を開け放った。

「わあ、酷い有様」

室内でソファに寝そべっていた、ウォルターの元同僚であるリンテンスにそう口を開きながら、女性……この都市の女王陛下であるアルシエイラは掃除機を持って部屋へとずかずか入っていく。

ウォルターはといえば、部屋から漂うおいに顔をしかめ、部屋へ立ち入らず入り口に立っていた。

「ちよつとウォルター、どしたのよ」

「…アルモニス、オレ言ったよな？ 用事があるンだつて」

「知ってるわよ？ でもほら、せつかくじゃない？」

「なんのだよ」

「ウォルターの方が掃除上手じゃない！」

「じゃあ最初から行くななんてほざくなよ」

くそ、と小さくウォルターが呟き、渋々部屋へ足を踏み入れる。

部屋は独特なおいで満たされている。それはリンテンスの吸っている煙草のにおい。ウォルターはそれが嫌で仕方がない。

あまり深く息を吸わないようにしつつリンテンスが寝そべるソファまで足を進め、窓に引つかかった鋼糸を引きちぎる女王へ気だるく視線を向けた。

「おいお前……本当オレを早く帰せ」

「嫌よ、手伝って」

「やだね、お前がやれ」

ウォルターは腕を組んでアルシエイラにそう言い、溜息を吐いた。ソファで寝そべるリンテンスはと言うと、酷く鬱陶しそうな顔をしてアルシエイラを見ている。

「……くそ陛下が」

「まったく。……つかハーデン、そのソファ座らせて」

「……お前もお前だな」

リンテンスの先程より三割増し程に機嫌の悪くなった視線を受けながら、開けてくれたスペースに座り込んだ。

目の前でがさがさと動くアルシエイラに軽く指示を出しながら、ウォルターはちらとリンテンスへ視線を向ける。口から紫煙を吐き出しながら苛立しそうにアルシエイラを見ていたリンテンスの金色の眼が、ウォルターを見た。

「なんだ」

「いや？ 別に」

「……ふん」

面倒くさい、と言いたげに息を吐きながら、リンテンスが煙草を消した。先程つけたばかりだったらしい長い煙草は、ゴミ箱へと葬られる。

アルシエイラによって窓が開け放たれ、においの発生源がなくなった部屋の空気は風によって運ばれ、その独特なおいを消していく。雑誌を崩すアルシエイラがまた埃をまき散らして、掃除機をかけた。

ウォルターの「中」でルウが眉根を寄せて、ぎりぎり歯を鳴らしながら言う。

(…なにに…？ キザなの、キザを気取ってるの？ 消したい、すぐく消したい)

(ルウ、何でそんな怒ってんだ…？)

(ああ、ごめんね？ キミの隣に座るヤツに激しく殺意抱いちゃって)
(…よくわからないんだが…)

内心で首をかしげながら、ルウが怒っているらしいと言うことだけ悟る。

ウォルターが腕を組んで考えていると、掃除機の音には負けるが、武芸者には十分な音量の声でリンテンスが話しかけてきた。

「お前、どうして天剣を手放した」

「ん？」

「あのガキの実力はお前との戦いを見ていて分かった。だが、お前には到底及ばない実力だ。あの程度、必要は無いだろう」

「オレが譲る必要が、ってことか？ それはオレが判断する。あいつは伸びるぜ？」

けらけらとウォルターが笑うと、リンテンスは先程より更に眼に鋭さを宿し、ほんの少しだけ怒りの感情をその瞳にのぞかせた。

「そんなことを言ったのではない。お前が、むぎむぎその才能を腐らせるのがおれは腹立たしい」

「それ、ルツケンスにも言われた」

「あいつと意見があうと言うのはなかなか腹立たしいが、同意見だ。……先程も言ったが、」

「分かった、分かったって。けど、オレだって考えなしにグレンダンを出るわけじゃない。色々とやることもあるんだよ」

ウォルターの発言に対し、リンテンスがやはり鋭い目つきのまま腕を組んだ。

肩をすくめるウォルターはソファの肘掛けに肘を置き、頬杖をつく。組んだ足先を上下に揺らしながら、せつせと動く最上級権限保有者を見つめる。

腕を組んだリンテンスが、指先でアルシエイラに千切られていく鋼糸を回収しながらウォルターに口を開いた。

「お前の『やること』を否定する気はない。…しかし、その地位を捨てる必要はなかったはずだろう」

「さてね？ オレもどこまでかかるかわからない現状じゃ、事を進める為に最善だと思える策をとるしか無い。それが、今回は『こういう事』だったただけだ」

「…：…どういう理由だろうと、お前は腐ることを選ぶということか」
「だから違うって言ってンじゃねえか。随分と怒ってンだなお前」

当然だと言いたげにリントンスは息を吐く。その行動にやはり肩を竦めつつ、ウォルターは組んでいた足を崩して組み直した。

アルシエイラは先程から2人で話し込んでいる事が不服らしく、掃除機を両手で構えてウォルターへにじり寄ってくる。

「ねえウォルター、手伝って！ この部屋ものすごく汚いのよ、1人じゃ手が足りない！」

「…ええ…、ヤだって」

「どうしてよー！」

「だから、おまえがやるって言い出したンだろが…オレが手伝う義理は無いだろ」

「やだああ手伝ってえええ」

「うるせえ」

ウォルターが苛立たしいとばかりに言い放ち、突き出された掃除機を足で突き返す。

やはり不服そうな顔でウォルターを睨め付けるように見るアルシエイラに溜息を吐きながら、ウォルターは、掃除機は突き返しながらも彼女が腰に差していたはたきへ手を伸ばした。

「つとに」

「さっすがウォルター！ やっぱりやってくれるのね」

嬉しそうに手を叩いたアルシエイラに眉を寄せながらウォルターはやはり溜息を吐く。

はたきを手にはたばたと部屋の角でリントンスがつけている鋼糸ごと埃等を払っていると、後ろからアルシエイラに声をかけられる。

「ねえねえウォルター、ウォルターは本当に良かったの？」

「お前まで言うか。しつこいぞ。……お前こそ怒ってないのか？」
「怒ってないわよ。だって、あんたのしようとしてることを止める方が大変なもの」

「…止められるかどうかを抜いたら、怒るンじゃねえのかよ」

息を吐きながらそうアルシエイラに言い返す。アルシエイラは小さく「うーん」と唸り、どうだろう、と呟いた。

「わからないわね。あんたが地位に興味無いことは知ってるし、何よりあんたを特別待遇程度で捕まえられるとは思わないし」

「ふーん？」

やけにあっさりと言ったアルシエイラに、ウォルターは片眉を上げてどこか怪訝な顔をした。

「なによ」

「いや…、お前のことだから軽く何か言うと思った」

「別に？　だって、一応『あんたのこと』知ってるんだし…、つべこべ言っていられないでしょ。どうせ、なんで、って聞いても言わないのがあんたでしょうし？　だったら意味ない」

「……まあ、確かに言われても聞かないが」

「はいはい、聞かなくても知ってるから。さっさとしてちょうだい」

やはりそう言うアルシエイラに、大人になったなあというか、よく分かっていらつしやると苦笑を浮かべ、はたきを動かした。

そんなアルシエイラの態度に対してもやや不服な天剣は半分以上だろうが、それでもウォルターは構わない。必要なのは、ウォルターが『目的を達成することが出来る』事。

その他は必要ないのだから。

「まあ、面倒なのは確かだけどね。最近、変な動きもあるみたいだし」

「そうだな」

「ウォルター、どうせ暇でしょ？　しばらく身を潜めてていいから、王宮にいてくれない？」

「はあ？　面倒くさいから嫌だけど」

「だーめ！　グレンダンにいる以上、あんたはわたしの管轄で

しよ。ってことで、よろしくね〜」

「……だったらはじめから疑問形にするなよ。オレが断ることくらい分かってンだろうが」

「てへ」

「かわいくないぞ」

ウォルターがさりりと言い返し、アルシエイラはむすつと頬をふくらませる。

ソファに寝転がり直したリントンスの頭を、ウォルターがはたきでぱしぱしと叩くと、不機嫌そうな眼が返ってきた。それにけらけら笑いながら、ウォルターは言う。

「まあ、ひとつだけ言っておきたいんだけどさ、ハーデン」

「……なんだ」

「アルセイフの事、ちつとでいいから気にかけてやってよ。…騒動が起きそうだからな。面倒事はすぐオレに回ってくる」

「……………それは、おれに片棒を担げと？」

「さすが理解が早い」

軽く肩を竦めてそう言いながらはたきを髪に落とすと、リントンスは先程より二割増し機嫌の悪い顔でそれを払いのけながら視線を逸らした。

「ふん。お前は見通しがいいのかいいのかわからん」

「良くも悪くもない」

「つまり微妙、と」

「酷いなおい」

「ちよつと働きなさいよ！ 女王ばかりに働かせてー！」

「お前はいつも働いてないんだからこういう時くらい働け」

そう言いつつウォルターは、またはたきを動かしはじめた。

一ヶ月が経った。

本日は老生体がグレンダンへ向かってきていて、新しく天剣授受者になったレイフォン・ヴォルフシュティン・アルセイフ初の戦いだ。

グレンダンの空中庭園、そして王宮には濃い汚染物質の雲の合間から暖かな日差しがちらちらと降り注ぐ。木陰ではないが、軽い屋根の陰に少し強めの風、軽く混ざって鼻につく汚染物質のにおい。これで汚染物質のにおいがなければ最高の場所で、ウォルターはうたた寝をしていたのだが、突如、王宮を震わせるほどの轟音が響いた。

そのせいで、オレは溜息を吐く。轟音が響く前から女王の剄の昂ぶりは気づいていたし、やるだろうとは思っていたが、本当にやった。

高圧縮の剄を放って中庭を壊して、後悔するのは女王の方だということだ。

ひよいと屋根の上から中庭を覗きこむ。

破碎した回廊の石柱、円形にえぐられた中庭の中心に立つ流麗な女性に視線を向けながら、オレはぼうつとした眼でその状況を見る。

女性はこのグレンダンの女王、アルシエイラ・アルモニス。

そしてその周りにいるのは天剣授受者のカルヴァーン・ゲオルディウス・ミッドノット、サヴァリス・クオルラフィン・ルツケンス、殺剄で少しだけ分かりにくいカナリス・エアリフォス・リヴィン、そして三王家の一つ、ユートノール家最後の一人、ミンス・ユートノールだ。

この騒動の目的はおそらく女王の殺害だろうが、なぜこのメンツなのかと考える。

ミンスはユートノールという三王家のひとつに属する家名の出で、天剣の座を狙っていた。だから、今回レイフォン・アルセイフに天剣が授受された事が気に食わないのだろう。単純に。だが、手順も踏んでいないミンスに天剣が授受されることなどまずない。レイフォンはなんだかんだいってきちんと手順を踏んできた。彼が同じようにしていたならば、ウォルターが天剣を譲るかどうかは置いておいて、試合は行われたのだ。

一番の原因は自分にあるというのに、ミンスはのんきだと思う。ユートノールというぬるま湯で甘やかされたミンスには、自分の非を

認めるといふのはなかなか難しいことかも知れないが。

それにしても、カルヴァーンはミッドノットという現在最も栄えているだろう武門の当主であり創始者。現在も天剣授受者を続ける50代とは思えない強靱な肉体と剋密度を誇る武芸者である。実力も申し分ない。それなのにいまミンスといるというのは、苦労性とプライドの高さが相まってミンスにうまく乗せられ、乗ったのだろう。

一番の理由は、天剣の年齢が幼すぎるということだろうが。天剣の地位もへったくれもないのが女王だとわかっているくせに、苦労性のカルヴァーンはやはり貧乏くじを引くようだ。

サヴァリスはサヴァリスで、天剣を授受した際にウォルターと戦闘になり女王に手がとどく前に叩き潰された。だが、そう言っても特に根に持つような人間ではない。常に戦いを求め、上昇志向にあるというだけで。となれば、ただ戦いたいという考えで乗ったのだろう。

となれば、サヴァリスに構うのはあまり意味のない行為だということだろう。サヴァリスもややウォルターと似たところがあって、出来るくせに政治的な事に関わるのを好まない。やろうと思えば出来る知能はあるくせに、だ。

まあ、ウォルターも人のことは言えないが。

では、カナリスはなんだ？ 三王家の亜流武門リヴァネスの出身。彼女の出身の武門は、大抵王宮警護の任や王自身の警護、公式式典……少し前にあった天剣の授受式のようなときには護衛の任もつく。カナリスは実力を見ぬかれ、幼いころからアルシエイラの力添え……もしくは影武者となるよう教育を受けて天剣となった。

……ただ正直、あの女王に必要かどうかは定かではないが。公にはあると公表されていて、事実上使っていないければそれはないのと同じだ。彼女はそれを危惧しているのだろうか。

ミンスが騒動を起こした理由はわかっている。
一ヶ月前の、レイフォン・アルセイフの天剣授受者任命式、と言うよりはレイフォンが天剣になるというその事実に対して異議の申し立てだろう。

彼の性格からして、アルモニス戴冠家の陰謀だとかよくわからんこ

とを言いそうだが。

—— あー…、くだらねえー…

ばかげた政治的な論議に付き合う気はないというのに。

ああ、まったく…：…くだらない。

つい先程の轟音で飛んでいた眠気が返ってきた。ウォルターは大きくあくびをしながら屋根の上で屈んだ体勢へ動いて、巻き込まれる前にさっさと逃げようとした。のだが。

「ちよつとウォルター?! あんたもいるくせに何シカトしよーとしてんのよー!」

「うげー…、面倒なのに捕まった」

「うるさい、殺到もしてないくせに見つけにくいのよあんたはっ! さっさと降りて来なさい!」

「やだね、子どもの喧嘩ならオレ巻き込まないでクダサーイ」

「なあんですって?」

こりやだめだ。

直感で感じたウォルターはしようがないとばかりに後方へ回転しながら中庭の回廊手前へ飛び降りる。

ぼろぼろになった4人を前に平然と腰に手を当て、ウォルターにむすつとした顔を向けるアルシェイラ。しようがないとばかりにアルシェイラの両頬を片手で掴んで、膨らんだ頬をしばませながら、屈みこんでいる周囲のヤツらへ気だるく視線を向けた。

「で、面倒なことはゴメンだ。全員手短に言え」

そう言つてさらさらと話を聞いていくが、やはりウォルターの想像通りだった。

ミンスは自己中心的な考え、サヴァリスもまた然り、カルヴァーンは仲裁がてら異議申し立て、カナリスは自害しようとする。

鬱陶しいとばかりにカナリスの両手を腕輪から展開した鋼糸で止めつつ、ウォルターは腕を組む。

どうしようかと考えていると、ミンスが叫ぶようにウォルターに言う。

「あなたもあなただ! あんな子どもに、天剣を授けるなど!」

「ああ？」

ウォルターが怪訝にミンスを睨む。その睨みにたじろぎながら、ミンスが口を開いた。

「わかっていないのですか。あなたが自分勝手な理由で天剣の座を降りたことで天剣という名を貶めたのですよ？ それも、あんな形であんな子どもに譲れば、約束されている地位は……」

「うるせえな」

ミンスに対し嘲笑を浮かべ、ウォルターは冷め切った眼で言い放つ。

「オレのモンをオレがどう扱おうとお前に関係ないだろ。名を貶めるだ？ こんな女王が上に立った時点で地位も名を貶めるもあるかよ、んなモン。ばかばかしい」

「……どういう意味よ」

「お前は黙ってろ、ややこしくなるから」

むつと唇を尖らせたアルシエイラの鼻をつまみながら、ウォルターはそう言い返す。

摘まんだ手をばしばしとはたき落とし、アルシエイラがしようがないとばかりに口を噤む。

だがウォルターの言葉はすでにミンスを怒らせるには十分だったようだ。

「天剣はグレンダン王家のものであって、あなたのものではない！ なにより、どうあろうと陛下の有り様を否定することは、天剣授受者として……いいや、グレンダン市民として恥ずべきだろう！」

「アルモニス殺そうとしたお前が言うな。大体オレはもう天剣授受者じゃないし、好き勝手言ってるのもいつもだろ。今に始まったことじゃない。……天剣なら全員知ってると思うけど……って、ああ、お前は三王家の1人であって天剣じゃないのか」

は、と小さく嘲笑すると、ミンスはやはり眉をしかめる。

「わたしを天剣にしなかったのはあなた達で、わたしを試合に出さず子どもを試合に出したのはあなただろう！」

「オレにそんな決定権はないし、あつたつて捨てるっての、そんなくだ

らねえ権限は。あつたつて生ごみ回収の日に生ごみと一緒に出すわ」
「権限と存在の重要性をわかっていないのか、あなたは？ 女王に唯一干渉できるのはあなただけで、女王を動かせるのもあなただ！」
子供かと思いなながら呆れ混じりにウォルターはため息を吐いた。
ミンスの言葉の端々には、「気に食わない」という感情があふれている。

「要するにオレが気に入らないってことだろ、それ。…だいたい、…権限だろうと天剣だろうとオレが受け取ったものを、オレが誰にやろうと関係ない。少なくとも、お前のようなヤツに渡しはしないな」

そう言つてミンスの言葉を鼻で笑い飛ばすと、ミンスの顔に明らかに怒りが見えた。

だがその程度だ。ウォルターはすでに興味が失せた顔でサヴァリスやカルヴァーンの方へ視線を向ける。

「で、そっちにまだ言いたいことはあるのか？ ミッドノットが三王家について不満があることは分かった。だからそれはアルモニスとその他の頭のヤツらはそれなりに動かすとしても、それ以外で現時点解決策が見えることは何かあるのか」

「僕は済んだよ。戦いたかっただけだから」

「…ああ、そうだろうな。お前は聞くだけ無駄だ」

ウォルターが呆れた表情を浮かべてそういうと、サヴァリスは眉根を寄せて苦笑した。

腕は折れているようで、若干額に汗が浮かんでいる

「酷いなあ」

「酷くない。事実だろが。だからお前はいいんだってどうでも。お前じゃなくて、リヴィンとか、ミッドノットは」

わなわなと肩を震わせ、カナリスは絞りだしたような声で言った。

「やつぱり…わたしは必要ないんですね。陛下にも、ウォルターがいま…」

「オレ関係あるか？ お前はお前だろ、しつこい」

「…いつも、そんなふうにするのね。…あーん、もう死んでやる！」
「だあからやめろつての。言うこと聞けばか」

鋼糸で固定している腕を無理に動かそうとする。無理に動かすとさすがに手首が切れてしまう。ウォルターはカナリスの両手首を掴んで鋼糸を解き、頭を抱え込むようにしてよしよしと撫でる。

まったく手のかかる同僚ばかりだと、大きくため息を吐いた。

「それで、ユートノールは。まだ、何か言いたいことが？」

「…あるとも。あるに決まっているだろう」

「ま、そういうのもいい。…だが、オレ達は武芸者だ。どうせなら、剣で戦うべきだろう？」

そうウォルターが言うとう空に巨大な陰が差し、中庭が大きな黒に覆われる。

それに眼を奪われていると、中庭の中央部へそれが落ちてきた。

「はは、派手にやるねえ。…リヴィンは落ち着いた？」

「…：…なんとか…。ウォルターはいいので？」

「まあ、別になんとも。中庭がこれだけ壊れたとなれば、なかなか修理も出来ないだろうし…巻き込まれるのはやだなあ…」

「かつて、あなたがしたことよりは派手じゃないと思いますが」

「ん…：…？ なんのことだ？」

ウォルターはとぼけた顔で肩を竦めつつ、カナリスから離れる。

若干苦笑交じりにカナリスは腕を組んだ。

「忘れたとは言わせませんよ。あなたは不可抗力だったとはいえ、サヴァリスと喧嘩して王宮をあなたの到で半壊させ、中庭まで壊したことは」

「…：…うん、そんなこともあったな」

遠い目をしながらウォルターは回廊の方へ下がりつつそう返した。

サヴァリス・クオルラフィン・ルツケンス。今回の騒動を起こした1人でもある。

彼は天劍授受式の際に、女王へ喧嘩を売ろうとした。だが、ちょうどアルシェイラ護衛担当だったウォルターが彼のそれを阻止した。そこまでは良かったのだが、そこからがいけなかった。

ウォルターとサヴァリスがやや組み手を繰り返していた途中、アルシェイラの野次を飛ばしにウォルターが言い返していると、サヴァリ

スが天剣を復元、手甲のついた拳で剋技を放ったのだ。

それに本人が言うには驚いたらしい——周囲は絶対にわざとだという噂で持ちきりだった——ウォルターは、いきなり衝剋を放った。しかも膨大で、密度の高い衝剋。瞬時に練られたらしい剋は王宮を半壊させ、中庭までも破壊した。

サヴァリスはウォルターが取り押さえたもの、お気にいりの中庭を壊されたアルシェイラは呆然としていた。

だがカナリスにとっては王宮を半壊させ中庭を壊したことより、「しようがないだろ」の一言でアルシェイラの文句をすべて一蹴したのが印象的だった。

なんとなく思い出していたカナリスは、息を吐きながらウォルターを見る。

「7年前のことですが、あれは衝撃的でした。わたしは天剣になって1年目でしたし、余計に」

「あー、そういえばそうだな。あれはびっくりしたから、咄嗟になっただけだ。瞬発的なもので」

「咄嗟、とか瞬発的な剋で、とかで王宮を半壊させ中庭を壊した事をすませられるのはあなただからでしょうね。知っていましたが、天剣授受者は本当に化物揃いだと思えましたよ」

「っは、そりゃあ我らが女王サマは化物集めをお望みなんだからしようがないだろ？」

ウォルターがにやりと笑みを浮かべ、そう言う。カナリスは怪訝な顔をしつつも頷いた。

「それは…そうですね。…天剣授受者のような属に『化物』と呼べるような実力を兼ね備える武芸者を、なぜ陛下は…」

「そういうことは、言わぬが花。それ以上は、知らぬが仏、つてな。天剣で居続ければ、いずれ必ず知ることだ」

「…そうですね」

「ああそうだ。…さて、オレは捕まる前に逃げるよ。三十六計逃げるに如かずって言うし。ごちやごちや考える前にとんずらすることにする」

けらけらと笑いながら言い、ウォルターは髪をかき混ぜながら踵を返す。

その背にやや眉根を寄せながら、カナリスが声をかける。

「今日は上機嫌ですね。言葉がスラスラ出てきます」

「そうか？ 普通だろ。じゃあ、後始末頑張れー」

ひらひらと手を振ったウォルターが、跳躍して姿を消した。

降ってきた塊から出てきたのは新参者のレイフォン・ヴォルフシユティン・アルセイフで、ウォルターとの確執がある子どもだ。その「面倒くさいこと」を避けるため、ウォルターはさつさと去っていったのだろう。

だが、とカナリスは思った。

『後始末頑張れー』

「……………やられました」

完全にやられた。

レイフォンとミンスの一騎打ちが決まったのは言いが、それにしても、完全に逃げられた。

なんとも思っていないなかったため逃してしまった。

半壊した中庭、三王家に課された事柄の調整。すべて放つていった。

「…………まあ、もう天剣ではありませんし、しょうがないですが…………」

もう少しいてくれても良かったのに。

そう思いながら、カナリスはため息を吐いた。

その笑顔の輪に、オレは

道を歩いていたら、唐突に声をかけられた。

僕がそちらへ眼を向けると、淡い赤色を基調にした服を着ている見知った顔の人がいた。

眼鏡に、錆鼠色の眼、山吹色の髪。確か、前にあったことがある。

「週刊ルックン」に勤めている、ミイファイの先輩に当たる人で、僕の小隊の先輩であるウォルターの同級生の人。

名前は確か……ミハイル・ルディア先輩だったはずだ。

「ええと……ミハイル先輩、ですよね？」

「そうそう。みんなだいすき！ ミハイル先輩だよー！」

「は、はあ……」

「なにその返事ー。つれないなー」

のほほんとした性格の彼は、むすつとした顔で僕を見る。

それで、と僕は苦笑しつつ話の先を促す。

「どうかされたんですか？」

「これからウォルターの家に行くところだよー」

「え？ ウォルターの家に……ですか？」

がさがさと手に持った袋をゆすりながら、ミハイル先輩は嬉しそうに言う。

「だけど、僕には不明解だ。あのウォルターの家に、どういう理由で行く必要があるのか、と。」

「どうしてですか？」

「え、知らないの？ 同じ小隊なのに……ああ、ウォルターだし、言わないね」

「……えっと……どういう……」

僕はミハイル先輩から視線を逸らした。彼は「ふふふー」と何処か意地悪そうな……と言うか、なにかを企んでいるような笑みを浮かべて、袋の中身を僕に見せる。

「彼、今日誕生日なんだよ」

「……………え」

「本当だよ？ 12月13日。なにせ、このミハイル・ルディアの情報だからねー！」

確かに、彼の言う情報は信用できる。

このミハイルという生徒は、おそらくツエルニ屈指の情報通だ。

あのウォルターが言うほどなのだ。

「あいつのテンションは理解出来ないが情報だけは信用できる。…情報だけは」

だけど、今の僕にはそんなこと関係なくて。

「…ウォルターが、今日…誕生日…？」

「ま、書類上だしウォルターのことだから、本当の誕生日かどうかはわからないけどね。さすがにそこまではさ」

片目を閉じて言いながら、ミハイル先輩は僕にそう言った。

それでも書類上とは言え、誕生日だと聞かされた僕は頭をがつんと殴られるのと同じくらい衝撃的なことだ。

ミハイル先輩は特に気にしていないようで、袋の中に入っているケーキごと僕に差し出しながら、先輩は言う。

「まあ、それはキミ達のお仕事だと思うしね。お願いしようかな、これ」

「どう…いう？」

「だから、十七小隊でお祝いしてあげて。ウォルターもそのほうが嬉しいと思うし。キミ達のことを、結構気にかけてるみたいだから…」

「え、ええ?! ど…どういう…？」

「鈍感ルーキーは先輩の厚意にも鈍感なのかな？」

「……………そ、そういう事では…」

「じゃあ、わかってる筈でしょ？ ウォルターに色々してもらったって自覚があるなら、十七小隊みんなで労ってあげてね」

につこりと笑ったミハイル先輩に、僕は啞然とした表情を向けた。渡されたケーキをおもむろに受け取った僕に、ミハイル先輩はやはり笑みを浮かべる。

「ちやあんと素直に言ってあげなくちゃだめだよ、おめでどうって。

「こっちはこっちで色々またサプライズしてあげるから」

「……………あ、…ええええ…」

「……言いなさいよ」

「が、頑張ります……」

僕はミハイル先輩に小さくそう返した。ミハイル先輩は満足そうに頷いて、足取り軽く去っていく。

だが、爆弾発言を残して嬉しそうに去って行かれても、僕としてはどうすればいいのかさっぱりわからない。

とりあえず、隊長に相談してみようと思った。

「何だどっ?!」

隊長はやっぱり怒っている。怒っていると言っても、いつものように激怒しているとかではなくて、なんだか嬉しそうだ。

「あいつ……また黙っていたのか、そういう大事なことを!」

「え、ええ……ついさっき、ミハイル先輩からそう言った話を聞きました……それで、隊長達と祝ってあげてくれて言われたんです。ケーキまでくれましたよ」

「助かる!・じゃあシャーニツド、ダルシエナ先輩、ハーレイ、フェリ、ナルキ、レイフォン、わたしで、早急に準備を進めよう」

「せっかくならレイフォンの同級生の女の子達も呼ぼうぜ。他のヤツもさ」

シャーニツド先輩がそう嬉しそうに言う。

彼もなんだかんだいって仲間思いの人だ。だから、ウォルターに対してこういうサプライズが出来るというのは嬉しいのだろうと僕は思った。

ほかの人たちを呼び集めて、練武館から移動した僕らは隊長達の寮で祝いの準備をすることにした。

前回のリーリンとレイフォンの誕生日パーティをした時の機材の

残りを更に修復して用意し、料理等はリーリンやメイ、そして僕が担当する事に。

ウォルターはと言うと、フェリが担当して足止めに行った。彼ははつきりと言われなければ大抵の事は気にしない。フェリもさっくりとした性格だし、言わないだろう。いまは目的をさっさと達する事が必要だ。

僕は出来た料理を運んでくれと言われて、皿を持ってリビングへ移動して行った。ちょうど、リビングでミイと隊長が話をしているのを小耳に挟んだ。

「隊長さん、ウォルター先輩って去年言わなかったんですか？」

「む？ …ああ、去年の夏終わり目ごろに入ったんだが、あいつはつっけんどんでな。何も教えてくれなかった」

「じゃあ、お祝いどころじゃなかったんですか」

ミイがどこか困ったような顔でそう呟くと、隊長は苦笑交じりに答える。

「まあ、そうだな。ただ…、事件があつて、それ以来ちよつとずつ、打ち解けてはくれたが」

「……事件？ 事件ってなんですか？」

「レイフオン。 ……そうだな、お前たちにも話しておくべきか」

隊長はそう言つて、作業していた手の速度を少し遅め、シャーニツド先輩へ視線を送った。先輩も苦笑していて、どうやら先輩にも色々複雑な思いがあることのようなのだ。

「ウォルターに、何が？」

「ウォルター、と言うよりも…わたし達十七小隊、そしてツエルニだ。 ……あの日は、予想外の事件が起きていて…わたし達は、無力だった。何も出来なかった。彼以外は」

「何が…あつたんですか？」

「…都市の端に、未だ放置されている廃墟があるだろう。その事件で火事になって崩れ、廃墟になったんだ。誘拐事件だった。犯人を追い詰め、逮捕直前までこぎつけたのだが、フェリが犯人の仲間に関われ…状況は絶望的だった」

どうして、学園都市であんな事件が起きたのか。

隊長の言葉には、苦渋がにじみ出ていた。僕はただ、隊長の話に耳を傾けるだけだった。

わたしは鼻につく臭いに顔をしかめていた。

学園都市とは思えない程、いま、この外縁部は悲惨な状況だ。なんと言っているのか…分からないほどに。建物は犯人の化鍊劉により炎上をはじめ、炎に飲み込まれつつある目の前の建物には、仲間がいるというのに。

わたしは何も出来ない。わたしは無力なのだと、目の前の建物が突きつけてくる。

そんなわたしの肩に、手が触れた。

「ウォルター…！」

「…状況は」

黒と赤の混ざった髪を揺らす、同級生…ウォルター・ルレイスフォン。

この都市で、最強と呼ばれる実力を持つ彼が、ここへ来てくれた。それだけで、わたしの心は一瞬軽くなる。だがそれでも、最悪の状況は続いているのだ。

彼は状況を聞きながら酷く面倒くさいという顔で、わたしの顔の横にその顔を覗かせる。

「…ロスが、中に」

「ああ。なんとかして助けなければ…だが、ここまで炎上しては、手が出せない」

「…他に誰かいるのか」

「実行犯は3人。それに加えてフェリダ」

「3人か。…計画的とは言いがたい。追い詰められてばかを晒しているようにしか見えない」

ウォルターはそう言って呆れたように眩き、重そうな腰を上げた。

後衛としていたシャーニッドもこちらへやってきて、慌てた顔をしている。

「フェリちゃんは？」

「まだ中だ。……ウォルター、どうする気だ？」

「都市警察を全員下がらせる。オレだけでやる」

ウォルターの言葉は冷静で、酷く重々しかった。

だがこんな状況に飛び込むなど、隊長としてもクラスメイトとしても許容出来るものではない。

「な……っ、ふざけるな！　こんな非常事態まで、お前のわがままが通じると思うなよ！」

「じゃあ、お前らのくだらない集団行動に足並みそろえて救出を遅らせるって？」

「そうは言っていないだろう！　お前のサポートをこちらがするから、お前もそれに合わせて、」

「冗談じゃない。お前らと手足揃えてたら鈍すぎて腐るぜ。分かったらとつと下がらせる。この押し問答自体無駄だと、いい加減気付け」

ざっくりと言い放たれ、わたしは呆然とした顔でウォルターを見た。

どうしろというのか。わたしは彼の小隊の隊長で、クラスメイトだ。こんな炎の中に彼を行かせるなど、みすみす死ぬと言っているようにも思える。だが、それをしなければフェリは死ぬだろう。

いま、この都市で彼ほどに腕の立つ武芸者はいない。彼についている武芸者もいない。

無理についていこうとしても、彼の足を引っ張るだけだ。ただの足手まといになる。

ウォルターはわたしの表情に気づいたらしく、大きく舌打ちをした。

「面倒くせえヤツだな。楽に考えろ、オレはただロスを助けに行くだけだ」

「多勢に無勢、状況も最悪だ。……行くのか」

「オレ以外、誰が行く」

ウォルターは腰の剣帯から錬金鋼を引き抜き、復元する。

形状は銃だ。銃口、装弾する箇所から剽が漏れでているのが、はっきりと見える。

このわたしに、剽を見る能力……と言うより、技術はまだなかった。活剽を濃く練ることは出来なかったし、衝剽もまだ密度が足りていないとは到底言えなかった。だが、そんなわたしが活剽をせずとも見るこゝとが出来るほどに、衝剽の密度が高いのだ。彼がいま練り上げている衝剽は。

「サポートなら念威端子だけで十分だ。念威が届きにくくなるのはこつちが何とかする。サポートにあたっている念威操者の念威端子をよこせ」

「あ、ああ」

シャーニツドがウォルターに念威端子を渡す。端子はポケットにしまい込まれ、ウォルターの持つ銃の剽が煌きを増した。

外力系衝剽を变化、銃弾・穿月。

槍のように鋭い銃弾が、豪速で建物の入り口を覆う炎へ突っ込んだ。それに遅れないよう、ウォルターが剽弾について半歩後ろを走って行く。

着弾した剽弾は、周囲の剽を捻るように巻き付けながら威力を増し、入り口を塞ぐ瓦礫等々すべてを破碎する。砕け散った残骸を飛び越えながら、ウォルターはあつという間に炎の中へ消えていった。

「……わたしは、待つことしか出来ないのか」

待つしか出来ない歯がゆさに、わたしは剣帯に収まるふたつの黒鋼錬金鋼を握りしめた。

オレは若干の焦燥感と共に建物へ突入した。端子と端子をつなぐ念威の保護はルウが行っていて、それを行っている代わりにオレに対して領域は展開されていない。

「念威操者、情報は」

(作りは簡単な建物です。突き当りを左手へ。その後は追って通信します)

「了解」

廊下の長さはせいぜい30から35メートルといった所だろう。旧多目的館とはいえ、やはり広い。

足にちからを込め、内力系活剷で走る。四方八方から炎が押し寄せてくる。それを衝剷で押し返しながら、オレは廊下を突き進む。

突き当りにはすぐについた。そのまま止まらず左手へ曲がり、再び端子へ声をかける。

「おい、次は」

(探査を続けていますが、熱によって感知がしにくい状況です。おそらくこの先の部屋だとは思いますが……詳しいことは)

「ち」

小さく舌打ちをこぼし、オレはルウへ声をかけた。

(ルウ、状況把握は出来るか?)

(念威端子と通信の保護のせいでお手上げ。やっぱり領域の強化をしなくちゃ)

(それは気が向いたらでいいよ。…つとに、役に立たない念威操者だ)

(僕もごめんね、もっと早くに、展開を細かく操作出来るようになっていれば……)

(気にするな、お前のせいじゃない)

ルウの言葉にオレは軽い調子で言葉を返す。そう、ルウのせいじゃない。

役に立たないヤツ揃いの都市にいるのだから、こういう事が起きればこうなるのは目に見えていたことだ。

押し寄せる炎を両手でかき分けながら、オレは走りにくい廊下を走って行く。

ちりちりとスーツの袖が焦げる。繊維の焦げるにおいが鼻をつき、建物の燃えるにおいが鼻の粘膜を焼く。腕で鼻と口を覆いながら、オレは内力系活剷に集中する。

炎が建物を焼く音に混じって、呼吸音が僅かに聞こえる。呼吸音は

廊下の更に突き当り。旧多目的館の中央多目的室。そこだ。

衝剄を放ちながら踏み込むと、床がぎしりと軋んだ。脆くなった木材と石材の建築に、オレ程の衝剄密度は耐えられないようだ。

（一気に駆け抜けるべきだな。ルウ、端子保護はもういい。突き抜けるぞ、頼む）

（りようかーい）

ルウの領域が身体にまとわりつく。衝剄はなしに踏み込み、再び加速する。オレは突き当りの扉を蹴破り中央に倒れているロスを見つけた。

「ロス、無事か？」

炎をかき分けてロスを抱え上げ、オレは呼吸を確認する。

若干弱い呼吸音だが、なんとか大丈夫だ。ルウに指示をしてロスを保護するように頼み、オレは反射的に前方へ跳躍した。

炎が包む床を転がり、スーツを燃やしながらオレは起き上がる。袖が燃えている。それを消す暇はない。引きちぎり、燃え盛る床へ脱ぎ捨てた。

「お前か、犯人は」

気絶したロスを右腕で抱え、オレは錬金鋼を構えた目の前の男を睨みつける。腕輪を復元し、刀を左手で掴む。片手が埋まった状況で、一人分加重されている。動きは通常より鈍い上、右側をすべてカバーしなくてはならない。

——なかなかに厳しい状況だ。……だけど

こんな状況でも余裕があるのは、オレが抱えるロスは大丈夫だと確信があるからだろうか。それとも、勝てると自信があるからだろうか。

できれば、あの戦闘狂のようなことからではないことを祈る。自分のことだが。

「っは、」

オレは刀を構えて踏み込む。

3人の誘拐犯がいると言っていた。ならば後2人。どこにいるかは不明だが、なるべく相手の数を減らさなければこの状況下ではいく

ら力量があるとはいっても不利になるだろう。

外力系衝剄を變化、かすみりゆう霞龍。

強烈な風が吹き荒び、周囲の炎を巻き込みながら男へ襲いかかる。だが、横方向から来た衝剄に阻まれ、男には届かない。

「つち、横か」

外力系衝剄を化鍊變化、りゆうしゅんじん龍遂迅。

刀を床へ向けて、込めた化鍊剄を放つ。衝剄は目標物に向かって床を這うように進んでいく。男たちのうめき声が聞こえ、目の前と横に居た男が呻き、身体を傾がせた。

オレはそのまましゃがみこんで、刀を上へ突き出す。

「ちい、」

殺意はオレの刀に受け止められ、火花を散らす。その火花は飛び散り、熱気を含む空気に吞まれ更に火の粉を散らしていく。

喉が熱い。火事の熱気で喉がやられつつある。早くしなければ、喉が火事によつて充満する超高温の熱気に喉が潰されるだろう。

くそ、と小さく吐き捨てて、なるべく熱気を吸わないように体勢を低くしてオレは上方にいる男の足を払い、刀を手の中で回転させ、柄尻を床に崩れ落ちる男の喉へ下方から斜め上方へ向けて叩き込んだ。

柄尻は男の喉を潰し、頸椎を潰すとそのまま環椎まで突き抜ける。骨の碎ける感触が柄越しに伝わり、柄は喉へ食い込む。

「一人目」

指の間についた血を衝剄でそれを弾き飛ばす。喉から引き抜きながら、オレは右足を軸にしつつ刀を持ち直し、踏み出す。

地面すれすれを走りながら、内力系活剄で周囲の炎を押しよける。ロスはルウの領域が働いているからこそ、絶対の安全が保証されている。ロスを空中に投げ、そのまま左手を少しひねる形で刀の鎧を背に密着させるように構える。刀を肩甲骨で支えながら肩峰の面を相手へ向け、向けられたやや幅広の剣を刀で逸らしながら突っ込む。

踏み込んだ足に重心をおき、体重に重力を加算させて相手の体勢を崩した。オレの現在正面方向から援護に来た相手の握る鍊金鋼、打棒のような形だ。それは上方からオレの頭を砕くべく振り下ろされよ

うとしていた。それを身体ごと逸らしてよけながら右手で掴み、捻り上げ、相手の手を離させる。

手が離れたのを確認すると打棒を宙へ放り、刀で押さえていた幅広の剣を弾いて刀を自由にすると、双剣へと変化させる。

外力系衝剄を变化、きようがいしゆ鋏刈首。

双剣を交差させ、刃を内側へ向ける外へ振り切る勢いと共に男の首を跳ね飛ばした。

振るった時に生じた衝撃波が周囲の石材を破碎させ、炎を纏う木材が降ってくる。双剣は刀へ形状を元に戻す。

降ってくる瓦礫はキャッチし復元した打棒と右腕で防ぐが、は、と気付く。ロスにはルウの領域が展開されているとはいえ、下降中に物的な衝撃を受けてはそれにより身体損傷を受ける場合もある。ルウに負担をかけるわけにもいかない。

オレは打棒に衝剄を込めて放ち、ロスの上へ落ちようとする木材や石材を砕く。

活剄衝剄混合变化、げっば月刃。

「セツ」

槍で放つための剄技だ、打棒のための技ではないし鋭さも足りない。舌打ち混じりに爆発ギリギリの剄を込めた打棒はなんとかロスへ落下物が衝突するのを防いだ。

だが、まだだ。後ろの男が剣を両手で握り腕を引くと、突き刺そうと切っ先をウォルターの脊髄部へ向ける。それを屈んで避け、拳で剣を上へ弾く。

しかし、男が練り上げた化鍊剄が刀を持っていた左腕にあたり、シャツが燃え、腕へ化鍊剄の炎が接触し、皮膚の焦げるにおいがした。刀は離さないまま、右手でシャツとネクタイを引きちぎって男へ投げつける。

男は服ごと再び突きを放った。化鍊剄を纏う突きだ。それを後方へ跳躍して燃えるシャツと剣を避けながらギリギリでロスをオレは抱えた。焦げた左腕は熱傷で使い物にならない。酷い火ぶくれが出来て、刀を握るためにちからを込めるたび血が滴る。

だがそんなこと気にしてはいられない。ロスを抱え直し、オレは構える。

男もじりじりと間合いを詰めてくる。間合いの取り合いと斬線のえがき合いを繰り返し、構えを動かしていく。

その時、足元で軋む音と碎ける音がした。それと同時に、右足が床に食い込んだ。

ふくらはぎに木の破片が突き刺さり、縦方向に赤の筋が入る。血が滴り、肉に木の破片が食い込む。老朽化した床は火災で更に脆くなつており、ロスとオレの体重によつていともたやすく突き破れてしまった。

男が剄を含む声で吼えた。足が抜けない。こうしている間にもじりじりと足は炎ともがく動きで食い込んでいく。

(やるしかないか)

(ウォルターっ)

(お前はそのまま置いてくれ)

左足に衝剄を込め、自身の足が食い込んだ床を破碎する。押し返された炎は勢いを強めて両足へ吸い付くように戻り、両足を焼く。砕けた床の破片と、元々食い込んでいた破片は更に深く突き刺さるが、構わない。振り下ろされる剣を刀で受け止めて、吼える。

外力系衝剄の変化、砲剄殺。

放たれた分子構造を破壊する衝撃波は男の錬金鋼を砕き、上方から落ちてくる炎と瓦礫を砕く。

男がそれによるめき、動揺した一瞬を突く。

外力系衝剄を化鍊変化、爆迅^{ばくしん}。

振るった刀から放出された剄が炎を押しつけ周囲の熱気を巻き込む、そして火花を散らすと、一気に放出された剄に火が付く。

オレはロスを右腕で抱え込み、爆炎に耐えるべく構える。

三階建ての建物の屋根を吹き飛ばすほどの爆発が起きた。

「な、なんだ?!」

「ニーナ、下がれ!」

シャーニッドに引つ張られ、わたしは後退する。

目の前の炎を空へ立ち上らせていた建物が一瞬その炎の勢いを弱めたかと思うと、一気に内包した熱気と爆炎をまき散らした。

破碎した壁や床が飛び散り、辺りへ飛び散る。

爆炎は上空へ巻き上がり空を赤く染めあげ、焦げくさいにおいを辺りへ撒き散らす。わたしはそれに顔をしかめ、中にいる2人の生存を危惧した。

「シャーニッド、他のヤツらを集めろ! すぐに……、」

わたしが声を張つたと同時だった。

シャーニッドの眼が一点を見つめて動かなくなる。驚愕で見開かれた視線の先を、わたしはなぞるように見た。

背後を赤く染め、四肢を赤く染めながら、フェリを抱えたウォルターがいた。

「……ウォルター?」

「あ? おら、ご要望のロスですよつと。エリプトン……先輩……頼み、ます」

ウォルターはやはり敬語にあまり慣れていないようで、若干の間をはさみながら、それでも敬語でシャーニッドにフェリを渡した。フェリは幸いほんの少しのやけどをしただけのようで、現在は気絶しているだけのようだ。フェリにわたしはほっと胸をなでおろし、大怪我を負っているウォルターに向き直った。

「ウォルター、すぐに簡易医療施設の方へ……」

「いい、面倒だ」

血の滴る四肢をぶら下げながら、ウォルターはしらつとした顔でわたしを見る。

特に気にしていない……というより、どうでもいいというような顔だ。

たった一人で燃え盛る建物に飛び込み、誘拐犯達を圧倒し、フェリ

を守った。フェリのことを、こんな大けがを負ってまで身を挺して守ったのだ。わたしが言わなければ、きっと彼はこんな怪我はしなかっただろうし、わたしにもっとちからがあれば、彼はここまでの怪我をしなかっただろう。

それが、悔しい。自分のちからが足りないことが、それがなによりも悔しいのだ。

わたしの表情に気づいたのか、ウォルターが右手でわたしの頭をぐしやぐしやと撫でた。

右の上腕から血が滴っている。それが一瞬傷んだらしく、ウォルターが若干眉根を寄せる。

それでも彼は、いつもの様に「笑みを浮かべており、わたしに言う。

「オレは大丈夫だよ。さつきとロスのところに行つてやれ」

「……………ありがとう。フェリを助けてくれて…満身創痍でも、帰ってきてくれて、嬉しい」

「……………へえへえ。どういたしまして」

ウォルターは再びわたしの頭をぐしやぐしやと撫でてから帰ろうと踵を返そうとした。だが、簡易医療施設にいた彼の友人でもある医師に捕まり、苦笑を浮かべながらその医師に引きずられるように医療施設の方へ引つ張られていった。確かティアリスと聞いたか。

ティアリスの近くには若干狼狽する山吹色の髪の男子生徒がいる。彼も、確かウォルターの友人のはずだ。あの3人は、クラスで比較的良好に居る。名前は、ミハイルだったはずだ。

ティアリスの表情が怒っているのは、随分と遠く離れたわたしからでも見える。ミハイルの表情もやや怒って見える。無茶をしたと叱られているのだろうか。それをウォルターが苦笑で返すところを見ると、やはり友人なのだろうとわたしは思う。

——だがしかし、悔しいな

何も出来ないというのは。

学園都市に来て、少しは変わったと思っていたのに。だがわたしは、まだまだ足りないようだ。

やるしかない。そう思った。

「ツエルニ……お前を守るためにも、わたしはもつと強くなる」
そう、胸の前で拳を握りしめた。

隊長はどこか苦々しい顔で僕を見ている。

それでも、隊長の言葉は力強く、はつきりと意志が見て取れるものだった。

「わたしはあの事で自分の非力さを思い知った。そして、レイフオン。お前の事でもまたそうだった」

「……………すみません」

「謝るな。いまは、少しずつだが強くなってきた。ウォルターも、打ち解けてきてくれている。少しずつでも進んでいる。……大丈夫だ。わたしは、自分の非力さに打ちのめされてなどいないさ」

笑みを浮かべた隊長に、僕は圧倒された。

その意志の強さが、とても眩しかったからだ。きつと彼も気づいている。隊長の意志に、輝かしいものがあるということに。

僕はウォルターに対して、確執を抱いていた。

彼は変わっていない。

僕が見ていたのは、人を酷薄に突き放せる程の冷たさだけだった。けど彼は、誰かの為に命を懸けてくれる強さと優しさも持っていた。

僕が知らない時から。いいや、気づいていなかったただけだろう。

隊長は笑みを浮かべている。

「お前もわたしも、そして……ウォルターも。皆不器用だ。お前の話を聞いていても思ったが、ウォルターはきつと、そういう事を素直になんて言えばいいのかわからないだろうな」

「……ふふ。そう、ですな」

僕が笑みを返すと、リーリンが遅いと厨房から怒鳴ってきた。僕がそれに苦笑交じりで声を返し、慌ててパタパタと厨房へ向かう。隊長

がポケットに持っていたフェリの端子に話しかけ、ウォルターを連れてくるよう指示した。

これを見たら、彼はどんな顔をするだろう。

ほんの少しの楽しみな気持ちと、彼に素直に言わなくてはという気持ちで胸を圧迫されながら、僕は厨房へ足を踏み入れた。

「そんな話だったんですか」

「まあ、オレは気にしてないけどね。完治もしたし」

オレとロスとは2人で商店街を歩いていた。

どういう理由か、今日は訓練がなくなつたらしい。ロスが買い物に付き合ってくれというので付き合ったわけだが、特に買うものはないという。

どう考えても不自然だ。

(なーんかたくまされてる気が。ルウ、アントーク達どこ?)

(うん、女子寮。みんなで)

(女子寮? ロスのことといい、オレに対して何かしようっていうのか...)

(あー...うん、そうかもね。まあ、気にしなくてもいいと思うよ...今回のことは)

ルウの言葉にオレは怪訝ながら頷き、わかったと返した。

他から見ればぼうっとしていたオレの腰を叩き、ロスがオレを呼んだ。

「イオ先輩、ティアリス医師には何か釘を刺されたんですか?」

「...ああ、怪我したからか?」

「はい。そうです」

「なんていうか...まあ、そうだな。」

『大怪我をしたならうだうだ言っていないでとっとと来い! 完全に炭化させて燃料にするぞ!』

.....って怒られた。医者としてあるまじき暴言だよな」

「自業自得です。：助けられたわたしが言えたことではありませんが」

オレは肩を竦め、ロスという言葉に苦笑する。

テイアリスの言葉：いや、言いたいこととかロスの言葉はごもつともだと思うが、グレンダンの医療技術だったら半日で治るものも、こつエルニではそうもいかない。正直なことを言うと、面倒くさかったのだ。

未だ傷痕の残る両腕、両足。熱傷の痕は消えつつあるが、まだ残っている。それを、どこか遠い目で見つめた。まあどちらにせよ、入院は酷く退屈で、面倒だ。

そんなオレの表情を見据えたのか、ロスが流麗な顔をしかめる。

「なんですか、その顔。絶対に面倒くさいって思っているでしょう」

「……はは」

「空笑いであればれます」

「気にするな」

オレが適当に言い返す。ロスはやはり不満そうではあったがとりあえずという顔で口を噤んだ。

ふと、ロスは念威端子を取り出し、何かを話すとオレに向き直る。

「なんだ？」

「行きましょう」

「どこへ」

「行けばわかります」

ロスに急かされ、オレはロスの後について歩く。

知った道を歩いて行く。この道は女子寮へ向かう道だ。ルウの言っていた通り、女子寮で何かをしているのだろう。

マーフェスやアルセイフの誕生日会は終了したし、もう何もイベントはないはずなのだが。

そう思いながら怪訝な顔でオレはロスの後について行く。

程なくして女子寮へついた。ロスはオレに扉を開けるように言う。何をたくまれているのか教えられていない身としては正直開けたくないのだが。

(……ブラックボックスってか)

(開けなくてもわかると思うけどね)

(そりゃ、ルウは領域展開してるからわかってるだろうけど……)

オレはそう息を吐きながら内心でルウに言う。

まあ、ルウはオレに危険が及ぶようなことならば必ず言ってくれるし、危険なことは待っていないのだろう。ルウのことは信頼している。

扉に手をかけ、息を吸い込んで、再び吐き、開いた。

扉を開けた途端、破裂音が響き、目の前をカラフルな紙吹雪や紙テープが散っていく。突然のことに眼を丸くしていると、後ろからもパンと音がして紙吹雪と紙テープが散る。

「……ロ、ロス……」

「遅れました」

「お前ね、」

「ウォルター」

アルセイフがオレを呼んだ。

そちらへ眼を向けると、ぱっと開かれたリビングには、豪勢な料理が並んでいる。

どういふことかときよとんとした顔で見ていると、一斉に全員が口を開いた。

『ハッピー・バースデー!』

その言葉に、一瞬思考が真っ白になる。オレは、慌ててルウに声をかけた。

(……た……、誕生日……だっけ……)

(……まあ、書類上は……。僕ら、はつきりしたのないし、グレンダンで使ってたの書いたでしょ? それがバレたみたい)

(へ、へえ……それで……訓練をなしにしてまでこんなこと? ……
なんで)

オレが狼狽しながら問うと、ルウは面白くないと言いたげ唇を尖らせる。

(まあ、ウォルターって「頼れる兄貴」とか「いつもお世話になつて

ます”みたいなのがあるからじゃない？　ちなみに、情報源はミハイル・ルディアみたいだよ)

(あの野郎……。どうしてオレの周りには余計なことを余計なヤツに言うヤツらばっかりなんだ?)

(そりゃあー…類は友を呼ぶっていうでしょ?)

(……友………友………?)

(そこ悩んじゃうの)

くす、とルウが笑った。僕は気づかなくてくれたほうが嬉しいよ、とルウに言われ、オレは余計によくわからなくなる。ただ、目の前で行われている事柄についてはわかった。

“オレの為に”開かれたのだ、と。

アルセイフが若干不安そうな目つきでオレの様子を伺う。

「あの、どうかしました？　……いやでしたか？」

「え？　……あー…えと。ただ、ちょっと………びつくりしただけだ」

オレが困った顔で襟髪を触りながら言うと、アルセイフ達の後ろに控えていたロツテンがぴよんと手を叩きながらはねた。

「それなら良かったですよ！　こっちもびつくりしちゃいましたよ、先輩、硬直しちゃうんですもん」

「あ、ああ…悪いな…。こういうことは、慣れてなくて」

「イオ先輩は本当に唐突なことに弱いですね。主に自分関係」
「悪かったな」

「ここら。フェリを覗むな。わたし達で準備したんだ。ほら、メインはお前。こっち来い」

アントークがそういつて笑みを浮かべ、オレを見る。

ちよいちよいとオレを呼ぶ。テーブルの中央には簡単だが中央に大きなチョコプレート、プレートがあるケーキが置かれていて、チョコのプレートには大きく誕生日おめでとうと書かれていた。

「あれは、トリンデンが？」

そう聞こうとして、とめた。プレートの下には小さく、それでいてみっちり書かれた文章があったからだ。

「……ルディアか……あれは」

呆れた顔でケーキのプレートを睨みつけるオレに、エリプトンがけらけらと笑いながら言う。

「よくわかったな、正解だ」

「そんな端に悪意を見せるプレートを作るのはあいつ位だろ、エリプトン……先輩」

「とにかく、突っ立っていたら折角の料理が冷めます。さっさと進んでください」

「酷いなあ」

ふくらはぎをロスに蹴られ、オレは苦笑する。

しようがないなあとばかりに肩を竦め、リビングの中央へ歩き出す。

笑顔。その表情達がどことなく、胸のあたりをあたたかかくしてくれた。

妙な感覚に襲われながら、オレは“笑み”を浮かべた。

なんだかんだ言って楽しんでるらしい。

ハイアは困っていた。

登校初日の昼。机の上にはウォルターが朝にもたせてくれたミュンファ、ウォルターと同じ弁当がある。朝は「ウォルターの弁当二回目さ！」なんて喜んではいしたが、いざ授業が始まり昼になる頃には、そんな気分は一切消えていた。

——どうしよう、ミュンファの所行くか…？

すでに中期を過ぎた学生のクラスでは、それぞれのグループが決まっている。つまり、こんな所で編入してきた新入生など相手にする様なグループは無い。結論、ぼっち飯。

——ウォルター…はいないし…

ウォルターは武芸科長に呼び出され、カリアンと共に今後の話と書類を提出しに行っている。このクラスに知り合いはいない、筈だ。

どうしようかと席で弁当袋をいじりながらまごまごしていると、目の前に影がかかった。

「……え」

山吹色の髪を揺らす、男子生徒だ。髪は少し長く、肩にかかっている。黒縁の少し大きな眼鏡をかけた男子生徒は、無言でハイアの席の前の机をガツンと勢い良くジョイントしてきた。

「な、なんさ、あんた!! なにしてんのさ!!」

「こんにちは」

「…こ、こんにちは…。…じゃ、なくて!」

「初めまして、ミハイル・ルディアよ。一緒にご飯食べましょ」

「は、あ…?」

言われている意味が一瞬理解できず、言葉を数度脳内で反復してようやく意味を理解する。

——唐突になんさ、こいつ…

怪訝な顔でじつとりと目の前の男子生徒…ミハイルを睨む様に見れば、ミハイルはけらけらと笑いながら目の前の席の椅子に腰掛けた。

「あはは、そんなに警戒しないで。アタシ、こう見えてウォルターの、数少ない、友人の一人なんだから！」

数少ない、とかなり強調して言ったミハイルは、いそいそと弁当箱を取り出しては机に広げていく。ハイアもやや気まずいながら、食べなければ昼休みが終わる、ウォルターの弁当を食べないのは勿体無い…と考えた結果、弁当を広げてとりあえず食べることにした。眼の前に座った男子生徒は未だ解せないが。

「ちよつとしたらダニーも来るわよ。今日までの提出資料出して来るって言ってたから」

にしても遅いわねえ、なんて零しつつ弁当のおかずの肉団子を指したピックをつまみ上げるミハイルには視線を向けられず、ハイアは斜めの方向を見ながらひたすら食べることに集中した。

「ウォルターもちよつとしたら来るから大丈夫よ、そんな警戒されたらアタシ寂しい…」

「…急に来られて、警戒しない方が無理さ…」

「そりやそうね！　じゃあもう少しちゃんとした自己紹介が必要かしら？」

プチトマトを口に放り込みながら、ミハイルは少しばかり首を捻り、それからハイアに向き直った。

「じゃあ、改めて。アタシはミハイル・ルディア。服飾科の三年。バイトはルックンっていう記者の仕事してるわ。最近は手を広げて衣服とかアクセサリーのお店でも働いてる。あ、愛称はミシエルだから、ぜひミシエルって呼んでね」

「…は、はあ」

「で、あなたは？」

「…ハイア・ライア。武芸科の三年編入、所属は十七小隊さ」

「へええ！　武器は何を使うの？　ウォルターと一緒に？」

「…あの人色々使うから一緒にどれかわかんないけど…刀さ」

茶目っ気たっぷりにウインクをしたかと思えばズイと顔を寄せて眼を輝かせ…瞬く間に表情を変えるミハイルに対し、やや身体を引きながらハイアは答える。質疑応答のようでやはり居心地が悪い。

ガラリと扉が開く音が聞こえ、足音がこちらに近づく。「ん」という聞き覚えのある小さな声が耳を掠め、ハイアは顔を上げた。視線の先に立っていた男子生徒の視線は、ハイアを超えてミハイルの方へ向けられている。

「…なんだ、もう食べてたのか」

「ダニーが遅いのよ。昼休みの時間は限られてるのよ?」

「わかっている。…というか、席くらい準備してくれてもいいだろう…」

「あのねえ、アタシ警戒されてるのにそんな気まわせると思う? そりゃ、ちよつと前にレイフォンくんに会った時はそれなりに弁えてたけど? 自クラスで同級生に話しかけるならありのままがいいじゃない?」

「お前みたいな個人的ド性癖露出野郎に来られたら誰だって警戒する」

「ちよつとそれどういう意味よ」

ジトツとやってきた男子生徒と茶化し合いを続けるミハイル。ハイアはダニーと呼ばれた男子生徒をしばし見ては、「あ、」と気づいた。

「ティアリス、さ?」

以前見た時との服装の違いが大きく、気づくのに時間がかかった。いまは制服姿できつちりと着こなされているが、医療機関の方ではやくたびれ気味の白衣、髪も最低限の気遣い以上のことはされていないかった。雰囲気の違いに、少しばかり戸惑う。

それを知ってか知らずか、ダニー…ティアリスは、「ああ」と声をこぼした。

「そういえばちゃんと自己紹介をしたことがなかったな」

近場の机と椅子を移動させ、やはりガツツンと勢いよくジョイントする。ティアリスは弁当を机に置いて椅子に腰掛ける。その隣でぶーぶーと文句を言うミハイルを無視しつつ、ティアリスはハイアに視線を向けた。

「ダノウイート・ティアリス。…ウォルターがファミリーネームでしか呼ばないから、知らんのも当然だな。こういうヤツにはダニーと呼

「ばれることもある。好きに呼べ」

「もくもくそっけなくない!? アタシこれでも一人で頑張ってたのに」

「お前もそういう事あるんだな」

「当たり前じゃない! アタシだって初めての人とコミュニケーションとるのは苦勞するわよ! ウオルターは『警戒心の強い犬と同義くらいで扱ってやれ』とか言ってたけどさく??」

「……ウオルターそんな事言ってたのさ……」

から笑いを零しながら弁当に手を付ける。さすがのハイアもミハイルとの距離はやや測り難く気も張っていたが、知り合いのティアリスが来たことで少しばかり気が緩んだ。

再びガラリとクラススの扉が開き、「あ」と聞き馴染みのある声が聞こえた。

「んだ、全員もう揃ってんのか」

「そりやそーよ。ウオルターがビリ」

「お前用事何もなかっただろうが」

「アタシはちゃんとあったわよ。ハイアちゃんに話しかけるっていう、重要なミッションが…ね!」

「腹立つ…」

「ウオルターのそういうしみじみとした言い方に刺さるわあ…」

「てかなんだ、お前のそのこいつの呼び方…。…こいつの幼馴染も同じ呼び方してた気がするが」

「かわいいでしょ。ちゃんと自己紹介したけど、あれこれリサーチ済みよ。オホホ、このミハイル・ルディア様の情報網にひれ伏しなさい!」

「あくすぐいすぐい」

「ダニーの興味の無さがすごい!! もくもくムカつくくくく!」

「…とりあえずウオルター座ったらどうさく…?」

「ん? ああ、そうだな」

ティアリスとは逆の机と椅子を動かし、勢いよくジョイントする。ガッツンとぶつけられたせいでやっぱり机が揺れる。ハイアの弁当

がずれて落ちかけて、慌てて箱を掴んだ。

「ちよっ！ あんたらなんでそんな勢いよくぶつけて来んのさ!? 机くつつけるくらいもっとおとなしくやってほしいさー!」

「は? …ああ、いやこれ競り合ってるんだよ」

「せ、競り合い? …なんのさ…」

「ふふふ…ついに聞いてしまったわね。簡単よ。勢いよく机をぶつけられて弁当を落としたヤツは大マヌケ野郎なのよ」

「…それなんの脈絡があつてやるのさ…」

「…ま、つまるところただの暇つぶしだ」

「暇つぶしでやってたんだが、まあ毎度恒例行事になっただけだ」

「あんたら以外にくつだらないうことやってんさね!」

「くだらないことにこそ全力をかけるのが青春ってもんよ」

「おれっちの知ってる青春と違う!!」

ウォルターは至つて気に留めた様子もなく普通に弁当を開いては箸をつける。弁当を食べきったミハイルは片付けを進めながら、まあ、と手を叩いた。

「このグループに来た限り…あなたも逃れられない運命にあるのよ。このくだらない青春から」

「自分でくだらないって言うようなことに他人巻き込むじゃねえさ〜!」

「いいのよ。この元武芸者と現武芸者頭力チカチで戦闘馬鹿なんだから、ちゃんと学生してる時くらいは、くだらないことするくらいで」

「だからって巻き添えは嫌なんだけど…」

「ホホホ残念ね。アタシが行動起こしたらもれなく巻き込まれるのよ」

「行動じゃなくて問題の間違いだろうが阿呆」

ぎゃいぎゃいと言いが合いが続いているが、いつものことの様で周囲の生徒に特にぎわめきは見られない。

ハイアはふと、先程まであった浮いた様な感覚がなくなっていることに気づき、それから三人に視線を向けた。

「頼むから怪我する事態だけは避けるよ、めんどくさいから…」

「心配してくれてるの？ うれし〜し〜！」

「おれは常々頭の心配してるけどな。ハハハ」

「あ〜〜冷めた笑い〜〜!!」

何気ないことだろうし、くだらないことばかりしている。ウォルターもこのことを聞いたらきつと同じことを言うだろうとハイアも思う。

——学生してる時はくだらないことするくらいで…

ハイア自身、ずっと傭兵団という環境で育ってきたからか、こういう環境には慣れない。ある意味で警戒を持ってしまって、近寄りがたく思っていたが、ウォルターは初めのうちどうだったのだろうか少し気になった。

けれど、＼ただの＼彼らと同じ様に笑うくらいには、馴染んでいるのだろう。

彼と同じ環境に身を置く。戦う。学ぶ。関わる。そう考えたら、いろいろと試せることもできることもあるのではないかと思った。それを少し楽しみに思いながら、ハイアは弁当を片付け始めた。

「ちよつと!! 話は終わってないわよ!!」

「終わった終わった」

「終わり終わり」

「終わってる終わってる」

「言うようになったじゃない!!」